

男鹿市大倉遺跡出土の弥生時代遺物について

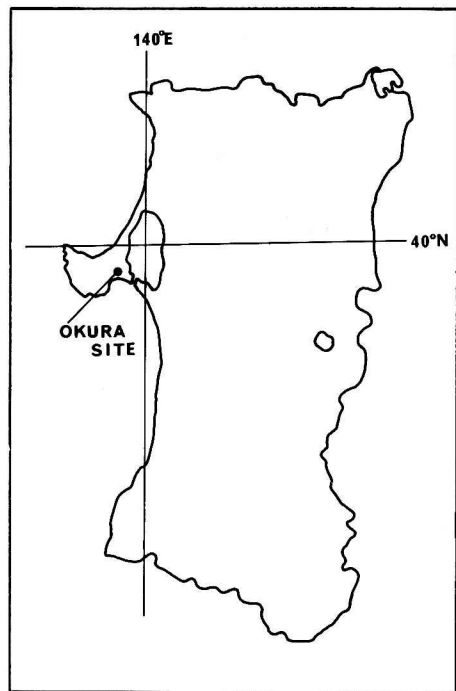
児 玉 準

I 緒 言

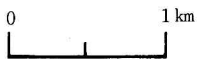
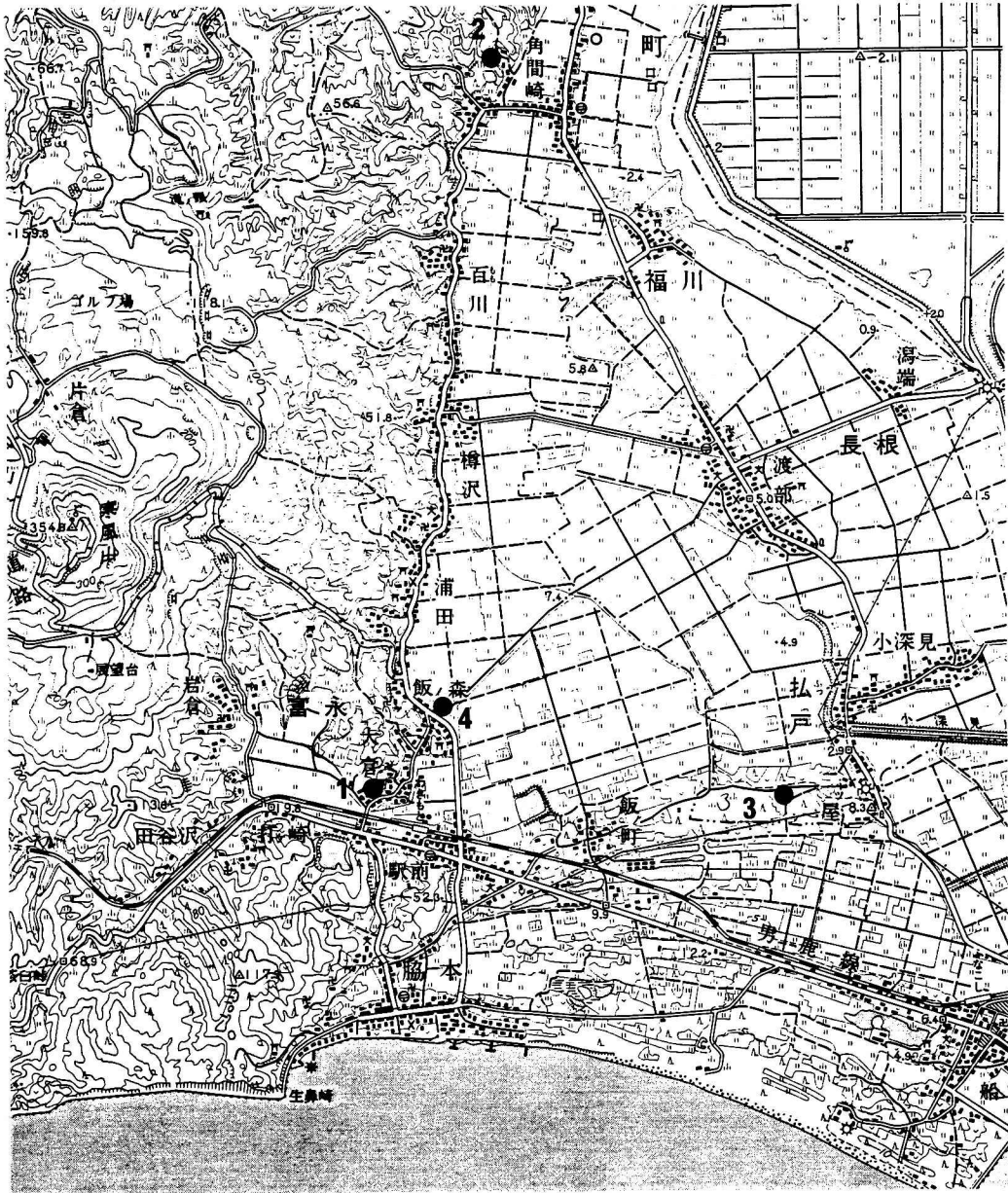
八郎潟西岸に位置する若美町，男鹿市脇本・船越は志藤沢式土器を出土する弥生時代の遺跡が濃密に分布する地域である。脇本富永字大倉に所在する大倉遺跡が土砂採取工事によって破壊を受け，その際に磯村朝次郎，泉明，目黒明彦氏および筆者らが，崩壊した黒色土の中から辛うじて遺物を収集し得たのは，昭和50年の春まだ浅い弥生3月のことであった。この時の遺物は，その後，男鹿市立男鹿東中学校生徒らの手によって洗浄され，確たる保管場所のないまま，昭和56年夏より筆者の手元にある。これらの遺物を速やかに復元・図化し，研究資料として多くの方々に提供すべきであったが，今日に至るまでそれを果たし得なかったのはひとり筆者の怠慢に尽きる。極めて恣意的にはあるが，ようやく整理を終了したので，以下に資料を紹介することとした。研究者の方々に少しでも裨益するところがあるならば望外の喜びである。

II 遺跡の位置

大倉遺跡のある男鹿市脇本の地形は，標高354.6mの寒風火山とその周縁部をとりまく丘陵地，そして丘陵地に挟まれた谷底平野と八郎湖に連なる湖岸平野，その上に乗る被覆砂丘および浜堤間湿地などを含んだ平野部，つまりは丘陵と平野という2大単元から成り立っており，しかもこれらが複雑に入り組むことなく，東の平野部，西の丘陵地という如く一線をもって明確に区分できるところに特色があると言えようか。



第1図 遺跡の位置



1 大倉 2 志藤沢 3 横長根A 4 飯森・小谷地

第2図 遺跡周辺の地形 国土地理院発行5万分ノ1「船川」使用 □

大倉遺跡は丘陵地の南端が低地に向って半島状に南西へ延びた、標高35m、現水田面との比高20mほどの小さな丘陵上にある。3方向は水田に囲まれており、遺跡地に立つと西側と南側は丘陵の間に挟在する狭い水田ながら、東側は八郎湖を介して秋田平野へと続く黄金波打つ水田地帯で、背景には出羽山地を望見することができる。

丘陵地と沖積地との交線は、八郎湖岸を西から取り巻くように東にやや湾曲しながら北へ延

び、5、6箇所の弥生時代の遺跡を介在させて、その延長線上に昭和32年に調査された志藤沢遺跡がある。大倉遺跡からは北へ5kmの位置である。昭和39～41年と56年に調査され、少量の弥生時代遺物を出土した飯森・小谷地遺跡は北東0.7kmにあり、58年に調査が行われ、炭化米を出土した横長根A遺跡は脇本郷から弧状に東へ延びる第Ⅰ列砂丘上にあり、大倉遺跡からは東へ2.8kmほど離れている。横長根A遺跡が沖積地の中の比高2m弱の微高地に占地するのに比して、志藤沢遺跡は比高20mほどの丘陵末端にあり、背後は平坦な潟西台地へと連なっている。丘陵末端を居住の場としながらも水稻耕作適地を丘陵前方の低地に求めることは当然であり、こうした点において大倉遺跡の立地環境は志藤沢遺跡のそれに似ると言ってよいであろう。

Ⅲ 遺物の出土状況

遺物は遺跡のある小丘陵の東側斜面から出土した。この斜面は約25度の角度をなし、土層は第Ⅰ層が一部に黄褐色の盛土を含んだ茶褐色の表土で、80～100cmの厚さがある。第Ⅱ層は褐色の遺物包含層で60～100cmの厚さを有し、第Ⅲ層が黒褐色土で30～50cmあり、遺物を全く含有しない。第Ⅳ層が黄褐色の地山である。竪穴住居跡等の遺構は丘陵の平坦面に存在が予想され、この斜面には生活残滓などを廃棄したものと考えられる。

Ⅳ 遺物

出土した遺物は、弥生土器のほか縄文時代晩期の条痕文のある粗製土器が1点、大洞A式土器2点、平安時代の土師器・須恵器が10点、中世の珠洲系陶器が1点、そして石器およびフレイクである。このことから石器の帰属時期は弥生時代と見なして誤りないであろう。

1 土器

大倉遺跡から出土した土器は、層位的まとまりや、遺構内からの一括出土によるものではなく、採集に近い状態で出土したものであり、しかも一瞥すると明らかに時期の異なる土器が含まれ、単一の時間幅に製作、使用されたものではない。このような土器群を整理するにあたって、まず土器の形態を観察して器種を認定し、器種と主として施文・装飾技法との結び付きの共通性から分類を行い、隣接地域との編年的対応関係から、ある程度の同時性を想定し得る各器種ごとのまとまりを群として捉えることにした。

大倉遺跡から出土した弥生土器の器種は、Ⅰ類（甕形土器）、Ⅱ類（鉢形土器）、Ⅲ類（高坏形土器）、Ⅳ類（壺形土器）、Ⅴ類（蓋形土器）の5類型によって構成される。

I 類 (甕形土器) (第3～11図)

I a 類 (第3図～第8図1～9) ゆるやかに外反する口頸部、膨らんだ胴部を有し、体部上半は内傾し、下半はしだいに内湾して底部へ至る。口縁部は平坦口縁であるが、小波状を呈するものも稀にある(第6図8)。体部と同一走向の斜縄文が施される。この斜縄文の下位には1～3条の平行沈線文が施される場合があり、この沈線文と頸部の沈線文との間には斜位または縦位の刷毛目調整が見られるが、横位の刷毛目調整は極めて稀である(第4図5)。刷毛目調整はそのまま残される場合と、横位のなでによって消去される場合とがある。肩部に平行沈線文が巡る場合には2条または3条が通例であるが、5条を施すものもあり(第8図4)、口縁部の平行沈線文とともに全くないものもある(第4図)。平行沈線文の下位には列点文が施されることがあるが、これが刷毛目工具の圧痕による木目列点文である場合と、その圧痕が観察されずに必ずしも刷毛目工具を使用したとは言えない場合とがある。最大の列点文は長さ3.4cmを測る。胴部には主として横位の刷毛目調整の後に斜縄文が施文されて底部周縁に至る。

I b 類 (第8図10・11) 口頸部がくの字状に強く屈折するものである。個体数は極めて少い。縄文が施文されている。

I c 類 (第9図, 第10図1～8) 口縁部が頸部から急角度で屈折するものである。内傾する頸部を有する長頸甕を含む。口縁部は第9図1・2の場合、低い山形突起を有し、2の山形突起頂部には刻み目が加えられ、これよりも細かい刻み目が口唇部に並列する。頸部から肩部にかけて平行沈線文、鋸歯文、重菱形文などの文様が施文される。鋸歯文は主として最下段の平行沈線文の下位に施されることが多く、第10図7・8のそれは上向きの連弧文となっている。器面調整として刷毛目を用いていることが多い。

I d 類 (第10図9～14, 第11図1～8) 外傾しながらも、いくぶん内湾ぎみの口縁部を有し、交互刺突文を主とした文様を施す。口縁部形態は平坦か、低い山形突起を有し、縦位あるいは斜位の細かな刻み目が施される。平行沈線文、上向きの連弧文、刺突文など、I c 類と共通する文様も見られるが、何よりも交互刺突文が本類文様の最大の特徴で、これに磨消縄文手法も加わっている(第11図1～3)。本類には刷毛目調整痕は全く見られない。

II 類 (鉢形土器) (第11～24図)

II a 類 (第11図9～15) 口径よりも器高が低い浅鉢形を呈すると考えられるもので、体部から口縁部にかけて直線的か口縁部のみ外反する。口縁部は平坦か、山形突起を有し、体部には結節点に粘土粒の貼瘤のある変形工字文が施されている。刷毛目調整痕は見られない。

II b 類 (第12・13図, 第14図1～4) 浅鉢形で、体部から口縁部にかけてほぼ直線的か、わずかに内湾し、頸部にわずかにくびれを有するもので、充填縄文、磨消縄文手法を用いて変形工字文などの文様が描かれる。小破片の場合、高坏形土器の坏部との区別が難しいものがある。

口縁部は山形突起をなすものが多く、内面にもこれに沿う山形状沈線文と水平に走る沈線文が描かれる。第12図4には沈線に沿って列点文、同図8には円形の刺突文が並列する。第12図1・6・7、第13図5・7は胎土に金雲母を含む。刷毛目調整痕は見られない。

Ⅱ c 類（第14図5～14、第15図、第16図1～12）体部から口縁部にかけてほぼ直線的か、わずかに内湾する器形で変形工字文を主としたモチーフが描かれる。平坦口縁が多いが、稀に小さな山形突起を有するものもある。口縁部は斜縄文による縄文帯となり、体部上半に変形工字文のみを描くものと、体部全体に地文として斜縄文を施した後に変形工字文を描く場合とがある。この他に列点文、平行沈線文が組み合わされる。第13図12、第14図12の胎土には金雲母を含んでいる。刷毛目調整を施すものが多い。

Ⅱ d 類（第16図13・14、第17図1～6）Ⅱ c 類同様に変形工字文のモチーフが描かれるものがあるが、口頸部にくびれを有し、口縁部が外反ぎみとなるものである。

Ⅱ e 類（第17図7～11）わずかに丸みを帯びた体部から口頸部が外反する。平坦口縁あるいは山形突起を有する。文様として口縁部と体部の平行沈線文の間に2条あるいは3条単位の上向きの連弧文が描かれる。体部の平行沈線文の下位には列点文を施す。刷毛目調整痕を有する。

Ⅱ f 類（第18図、第19図1～6）体部から口縁部まで直線的に開くか、わずかに外反する器形で、横位の平行沈線文が施される。平坦口縁と山形突起をなすものがあり、口縁部にはほとんどが斜縄文の施された縄文帯となる。多くの場合、口縁部内面にも平行沈線文が見られる。第18図1は2段にわたる平行沈線文が工字文となっている唯一の例である。平行沈線文は2ないし5条単位で間隔をあけて施され、これが4段以上にわたる場合がある。（第18図14）。刷毛目調整痕が顕著に見られる。

Ⅱ g 類（第19図7～10）Ⅱ f 類と同様に平行沈線文が施されたものであるが、口縁部にくびれを有する。10の土器は胎土に金雲母を含んでいる。

Ⅱ h 類（第20図1～12）浅鉢形土器で、主として鋸歯文が描かれる。9は体部にくびれを有し12は体部下半が著しく丸みを帯びる。2は口唇部と口縁部外面に木目列点文（第三図版4）を並列し、鋸歯文は内面にも及ぶ。8・9には平行沈線間を充填する縦位の刻み目文が見られ、9の上部はやや崩れた重菱形文である。口縁部に縄文帯を有するものは1のみである。ほとんどの土器に刷毛目調整痕が認められる。

Ⅱ i 類（第20図13・14、第21～第23図1～5）Ⅰ a 類の甕形土器をそのまま小型化した形態で口頸部文様も類似する。口頸部はゆるやかに外反し、体部上半はわずかに丸みを有している。口縁部に低い山形突起を有するものは少なく、小波状もしくは平坦で、外面に斜縄文が施され、多くは内面にも1～3条の沈線がめぐる。斜縄文がなく、刻み目文である場合もある（第22図9）。頸部にも平行沈線がめぐるが、その下部は無文帯となり、さらに肩部にも頸部に呼応す

るように2～6条の沈線がめぐる。この部位の沈線には粘土粒の貼付がなされるもの（第21図9、第22図1）や、縦位の短沈線が加えられるもの（第23図4）、工字文となるもの（第23図5）などがある。平行沈線文の下部には列点文が施されるもの（第22図17）もある。第22図16には頸部内面に斜縄文が施される。体部は斜縄文である縦位の場合もある（第22図1・13）。

Ⅱ j 類（第23図6～15）甕形土器を小形化した形態で、沈線文が施文されずに縄文のみを施す。口頸部がなだらかに外反するものと、わずかに頸部がくびれるものがあり、13はくびれの度合いが大きい。8～11、14はくびれ部が磨かれて無文帯となっている。

Ⅱ k 類（第24図）口縁部から底部に至るまでほぼ直線的か、口縁部付近のみわずかに内湾する。太めの沈線と充填縄文手法を用いて連繫菱形文や流動的な曲線文などの文様を描く。

Ⅱ l 類（第25図1～10）口頸部が体部から急角度で外傾ないしは外反する。肩部から体部中央部にかけて丸みをもって膨らみ、直線的に底部に至る。口径よりも体部最大径が大きい。1～5は大きな山形突起を有し、これに沿って両面に沈線文が描かれる。2は口唇部に刻み目が並列し、内面には山形に沿う3条の沈線があり、この下位の横位の沈線との間を連絡して縦位の刻線が加えられている。肩部文様帯には縄文の他、変形工字文、波状工字文、刺突文などの文様を施す。1の変形工字文、9の波状工字文の結節部には明瞭な粘土粒の貼付が見られる。

Ⅱ m 類（第25図11）頸部がわずかに丸みを帯びて膨らむ。口縁部はゆるく外傾するらしい。肩部文様帯に縄文と、丁寧に描かれた鋸歯文を有する。

Ⅱ n 類（第26図1～4）口縁部が頸部から屈折して外傾し、頸部は肩部からほぼ直立する。肩部はわずかに張り出すが、頸部との屈折は明瞭である。低い山形突起を有し、突起の頂部には大きめの刻み、口唇部にはそれよりも小さな刻み目を並列する。口縁部文様帯には斜縄文、頸部には平行沈線文と無文帯が設けられる。2の場合、この平行沈線は12条にも及び、その上下を結ぶように弧線を描く。無文帯の下位に7条の平行沈線文と、鋸歯文を施文している。

Ⅱ o 類（第26図5・6）ゆるやかに外反する口頸部を有し、平行沈線文と鋸歯文を施す。

Ⅱ p 類（第26図7～9）口縁部がゆるやかに外反し、体部もわずかに膨らんですぼむ。横位の平行沈線や曲線文、斜縄文が施されている。9は磨消縄文である。

Ⅲ 類（壺形土器）（第27～31図）

Ⅲ a 類（第27図1）口頸部がやや急角度で外反する。口縁部外面に2条、内面に1条の沈線を施す。他はよく磨かれて無文である。胎土に金雲母を含有する。

Ⅲ b 類（第27図2～7、第28図1・2）磨消縄文、充填縄文手法を用いた文様が描かれる。第27図4・5・7、第28図1・2などは強く膨らんだ球形の体部を有する。横位沈線文と鋸歯状文の組み合わせ（第27図2～4）、連繫菱形文（同図6）、錨形文（同図7・第28図1・2）などの文様がある。刺突文、縦位の刻み目文も併用される。第27図7・第28図1・2の胎土には金

雲母が含まれる。

Ⅲ c 類 (第28図 3～11, 第29図) 短かく外反する口頸部を有し, 肩部は大きく張り出す。肩部に 3, 4 条の平行沈線と, その下位に木目列点文, 体部最大径付近にも平行沈線が施され, 両者の平行沈線を結んで 3～5 条の沈線が垂下する。この縦位の沈線の両側にも列点文が施されるものがある。口頸部, 肩部は多くは丁寧な磨かれるが, 斜縄文を施すこともある。第29図 9・11などは極めて大型の壺である。

Ⅲ d 類 (第30図 1～9) 肩部のみの破片であるが, 変形工字文と刺突文が施文される。

Ⅲ e 類 (第30図 10) 無頸壺である。少くとも 3 段にわたって平行沈線文が施されている。3 個の補修孔があり, 外面と土器断面に天然アスファルトが付着している (第四図版 2)。

Ⅲ f 類 (第30図 11・12, 第31図 1・2) 肩部をめぐる平行沈線文を施す。第30図 12 の下段の平行沈線には縦位の短刻線が見られる。第31図 1・2 は 3 条単位の上向きの弧線が加えられる。

Ⅲ g 類 (第31図 3～10) 肩部文様帯に鋸歯文, 重菱形文が施文される。鋸歯文は 4 のように平行沈線と交互に, 少くとも 3 段にわたる場合がある。5・6 は 2, 3 条 1 単位で施文される。

Ⅲ h 類 (第31図 11) Ⅲ a 類の口頸部形状に類似して, ゆるやかに外反する口頸部であるが, 口縁部および頸部・肩部の境に刻み目を有する隆帯がある。口縁部隆帯の刻み目は幅広く, 相互の間隔も広い。この下位に 3 条の平行沈線があり, 口縁部内面にも 1 条めぐる。

Ⅳ 類 (高坏形土器) (第32・33図)

Ⅳ a 類 (第32図 1・2) 口縁部が軽く外反し, 頸部はくびれ, 体部がほぼ直線的に脚部付け根に至る。口縁に低い山形突起を有するが, その単位は不明である。1 のくびれ部付近には縄文帯を残し, 体部下半の斜縄文との間に変形工字文が描かれる。1・2 ともに口縁部内面にも沈線がめぐる。

Ⅳ b 類 (第33図 4) 坏部と脚部付け根付近に平行沈線を引き, その間を斜縄文で埋める。坏部はわずかに内湾している。

Ⅳ c 類 (第32図 3～12) 脚部に平行沈線文と波状文が描かれるものである。沈線文の他はよく磨かれるが 10 のみ縄文を施す。脚部はわずかに内湾するが, ほぼ直線的な場合もある。

Ⅳ d 類 (第33図 1・2) 脚部に 2 段にわたる平行沈線が施される。器面はよく研磨されている。

Ⅳ e 類 (第33図 3) 沈線による区画内に縄文を充填した文様が脚部に描かれる。

Ⅳ f 類 (第33図 5) 付け根からほぼ直線的にのびる脚部である。上下の平行沈線間に 2 条 1 単位の鋸歯文が施文される。

V 類 (蓋形土器) (第32～34図, 第35図 1～4)

V a 類 (第33図 6～14, 第34図 1～9) 笠形を呈する。上面は凹み, 多くは丁寧な磨きが行なわれる。上面と側面の境は直立するか, わずかに外反する。側面は端部までほぼ直線的にのび

る。

V a₁ 類 (第33図 6・10・14, 第34図 1・5～8) 無文か刷毛目あるいは斜縄文のみのもの。

V a₂ 類 (第33図 7～9, 11～13) 側面に平行沈線文が施される。第33図 8・9のように側面下部に2段にわたるものがあり, この場合, 沈線の間には篋磨きが施されている。つまみ部分に斜縄文を施すものがある(第33図13)。

V a₃ 類 (第34図 2～4) 沈線と磨消縄文による文様を描く。3は側面に無文帯がめぐり。4は沈曲線による複雑な文様を施したものである。

V a₄ 類 (第34図 3・9) 平行沈線と磨消手法を用いる。9には4条単位の鋸歯文がめぐり。

V b 類 (第34図10～12, 第35図 1・2) 倒皿形を呈する。上面は平坦であるが, 第34図12のみわずかに凹む。上面に十字形文, 側面に平行沈線がめぐり。鋸歯文も見られる(第35図2)。

V c 類 (第35図 3・4) 偏平な板状を呈するが, 上面がわずかに丸みを帯びる。3は端部に1条の沈線がめぐり, 少なくとも17条の平行沈線が施される。4は2重の同心円の中に十字文を描き, この中に走向の異なる縄文を交互に施文する。円文の間は無文帯となし, その外方にも縄文を施文する。

その他の土器

第35図 5～10: 台付鉢形土器の台部で, 平行沈線文, 弧線文, 刻み目文などが施される。10は透し孔を有する。

第35図11～14: 甕形土器の底部周縁部である。この部分のみ横位の刷毛目調整が顕著である。

靱圧痕土器: (第四図版 5・6) 甕形土器底部の縁辺部に靱圧痕が付着する。大倉遺跡出土土器の中で靱圧痕を認めるものは本例のみである。

2 石 器

石 鏃 (第36図 1～5) 1～4は凸基有茎式で基部の作り出しが明瞭である。全体に厚みがなく, 調整は1を除いて縁辺部に限られる。1～3は基部に天然アスファルトが付着する。5は凸基無茎式で, 片面中央部に自然面を残し, 1～4に比べ厚みがあり, 丁寧な調整が施される。

石 錐 (第36図 6) 縦長の剥片の縁辺と末端に調整を加えるが, 主要剥離面を大きく残している。基部と錐頭部の区別は不明瞭である。

スクレイパー (第36図 7～16, 第37図, 第38図 1～6・8)

1 類 (第36図 7～14) 剥片の両側縁と端部に調整剥離を施し, 自然面や主要剥離面を大きく残す。端部とほぼ同じ幅か, あるいはやや広い刃部を有し, 比較的小型である。9は有柄である。

2 類 (第36図15・16, 第37図 1～5) 1類よりも長さに対する幅の比が大きく, 丸みのある形状を呈する。側縁には, 全く調整の加えられないものもある。第37図 5は短い柄を有する。14

の端部には天然アスファルトが付着している。

3類（第37図6・7）横長の剥片を利用したもので、自然面や主要剥離面を大きく残し、わずかに調整を加えて刃部を形成する。

4類（第37図8・9，第38図1～6・8）両面に加工した縦長で比較的大型のスクレイパーである。第38図8は打製石斧とすべきか。厚みがあり、断面が菱形を呈するものがある。第38図2は一端を細く加工して柄を作り出したもので、5もやや長い舌状の柄を有する。

磨製石斧（第38図7）基端部のみであるが、両面、両側縁ともに丁寧に研磨されている。

凹石（第39図1・2）1は長さ14.8cm，幅5.6cmの自然礫を利用したもので、1面を除いて凹みがある。2は半截した礫で、1面に小さな自然面を有する。

その他の石器（第39図3～7）3・4はともに自然面を有するもので、側縁に調整を施す。5は剥片の上下両端の両面から調整を加えたもので、偏平かつ小型である。「楔形石器」に類似する。6は両面から調整を加え、両端を細く尖らせたものである。7は長さ3.3cm，幅1.1cmと細長い石器で、1側縁と両端に調整を施している。

V ま と め

秋田県内出土の弥生土器編年に関して幾ばくかの卑見を述べたことがあるが、その後、遠賀川式土器を伴う極めて古い段階の土器群が報ぜられ、さらに後北C₂式土器と終末期の弥生土器の確実な伴出例も出現するに至った。これらを加えた編年は、釜田出土の大洞A'式の直後の土器として、地藏田B・新聞・平鹿出土の土器があり、その後に湯ノ沢A，手取清水，横長根A，宇津ノ台I群，三十刈・宇津ノ台II群，小坂町などの天王山式と続き、後北C₂式と伴出する小坂X式へと至るものと推定されよう。

こうした編年観に基づいて、大倉遺跡出土土器の各類型をある程度同時性が想定されるまともによって群として捉えと、大倉遺跡の土器は1～5群に大別することができる。1群は地藏田B・新聞・平鹿の段階に併行する時期の土器で、量的には少ないが、II a類，III a・c類，IV a類の一部・IV c・d類などが該当するものと考えられる。2群にはI a類，II b・c・d・e・f・g・i・l・m類，III c・d・e類，IV a類の一部・IV c・d類，V a₂・a₃・b類などがあり、湯ノ沢Aないし横長根Aの時期にわたるものであろう。3群としてはI a類，II k類，III b・c類，IV e類，V a₄・c類があり、ほぼ宇津ノ台I群に併行する時期が与えられる。4群はI c類，II h・o類，III g類，IV f類で、三十刈・宇津ノ台II群と共通性を有している。5類はI d類とII p類で天王山式土器である。これらの変遷を第40図に示した。

大倉遺跡から出土した土器は前述のように発掘調査によるものではないが、県内資料と対比

させてみると年代幅が認められながらも、その主体は2・3群の時期にあり、近隣では横長根A遺跡などと併行する時期にその主たる活動が行なわれ、その後もわずかながら継続して営まれたものであろう。出土土器の編年的位置関係については近県の研究成果を参酌して、後日その誤りを補訂することとしたい。

参考文献

- 半田市太郎 「志藤沢遺跡発掘調査報告書」『秋大史学』 第9号 1959（昭和34年）
- 伊東信雄 「東北北部の弥生式土器」『文化』 第24巻第1号 1960（昭和35年）
- 奥山 潤・安保 彰 「十和田湖西南部（小坂鉦山）の弥生式文化とその後続形態（上）・（下）」『考古学雑誌』 第49巻第2, 3号 1963（昭和38年）
- 奥山 潤 「秋田県北半部の弥生文化終末後の土器序説」『秋田考古学』 10周年記念特集号 1964（昭和39年）
- 秋田県教育委員会 『協本埋没家屋第三次調査概報』 秋田県文化財調査報告書 第11集 1967（昭和42年）
- 富樫泰時 「男鹿市協本埋没家屋遺跡出土の続縄文土器について」『物質文化』 第10号 1967（昭和42年）
- 須藤 隆 「秋田県大曲市宇津ノ台遺跡の弥生式土器について」『文化』 第33巻第3号 1970（昭和45年）
- 横手市教育委員会 『手取清水遺跡発掘調査報告書』 1974（昭和49年）
- 中村五郎 「東北地方南部の弥生式土器編年」『東北考古学の諸問題』 1976（昭和51年）
- 小武海松四郎 『靱痕土器をともなう秋田県南秋田郡井川町新間遺跡遺物について』 1977（昭和52年）
- 男鹿市教育委員会 『協本埋没家屋第四次発掘調査報告書（小谷地遺跡）』 男鹿市文化財調査報告書 第2集 1982（昭和57年）
- 伊東信雄・須藤 隆 『瀬野遺跡』 1982（昭和57年）
- 須藤 隆 「北辺の弥生文化」『縄文土器大成5——続縄文』 1982（昭和57年）
- 須藤 隆 「弥生文化の伝播と恵山文化の成立」『考古学論叢Ⅰ』 1983（昭和58年）
- 須藤 隆 「東北地方の初期弥生土器——山王Ⅲ層式——」『考古学雑誌』 第68巻第3号 1983（昭和58年）
- 中村五郎 「東北中・南部と新潟」『三世紀の考古学』 下巻 三世紀の日本列島 1983（昭和58年）
- 秋田県教育委員会 『平鹿遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書 第101集 1983（昭和58年）
- 秋田県教育委員会 『三十刈Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書 第110集 1984（昭和59年）

秋田市教育委員会 『秋田市秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』

1984（昭和59年）

若美町教育委員会 『横長根A遺跡』 1984（昭和59年）

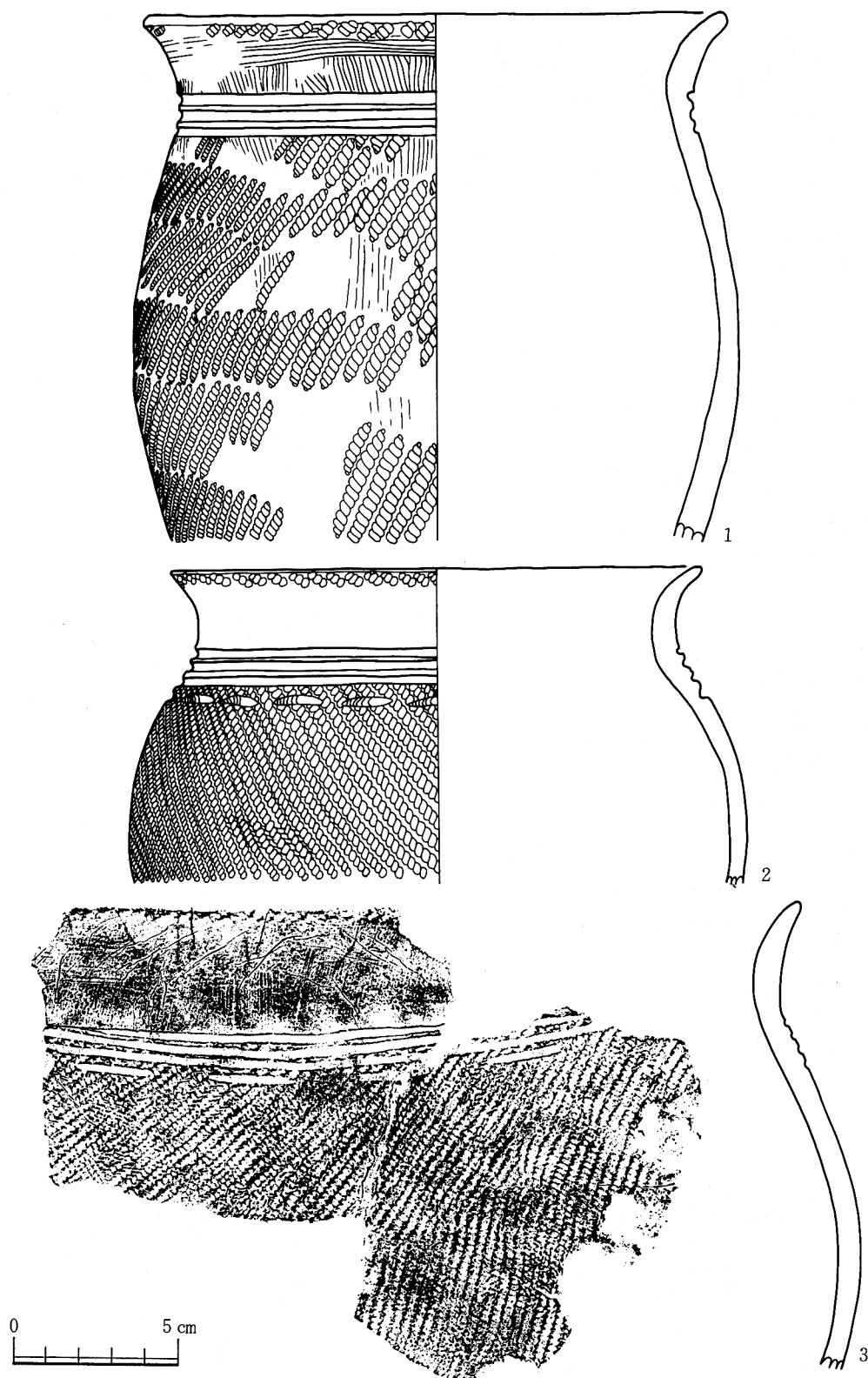
須藤 隆 「東北地方における弥生時代農耕社会の成立と展開」『宮城の研究』 第1巻 考古学
篇 1984（昭和59年）

青森県教育委員会・垂柳遺跡発掘調査会 『垂柳遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書 第88集

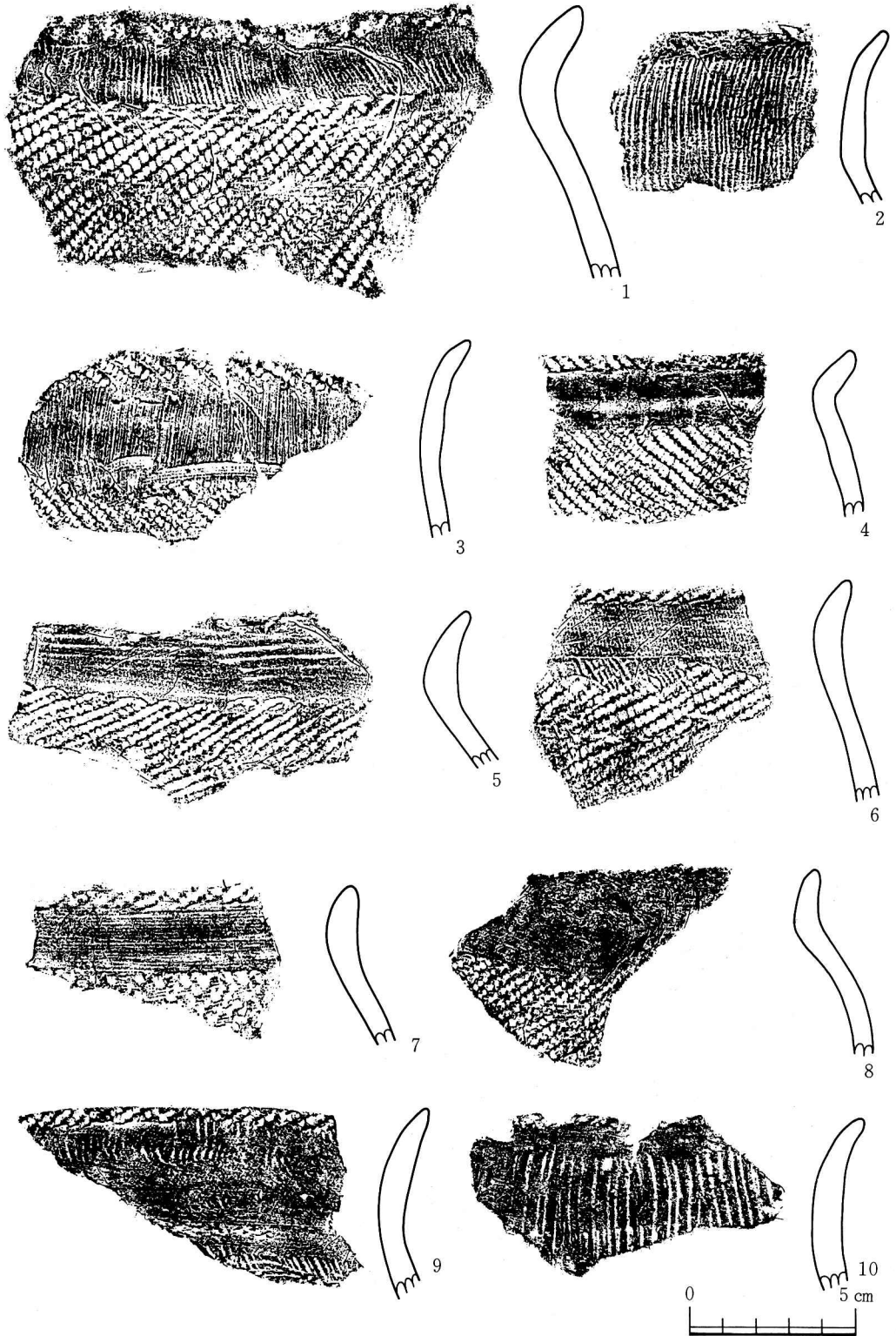
1985（昭和60年）

秋田市教育委員会 『秋田市秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』

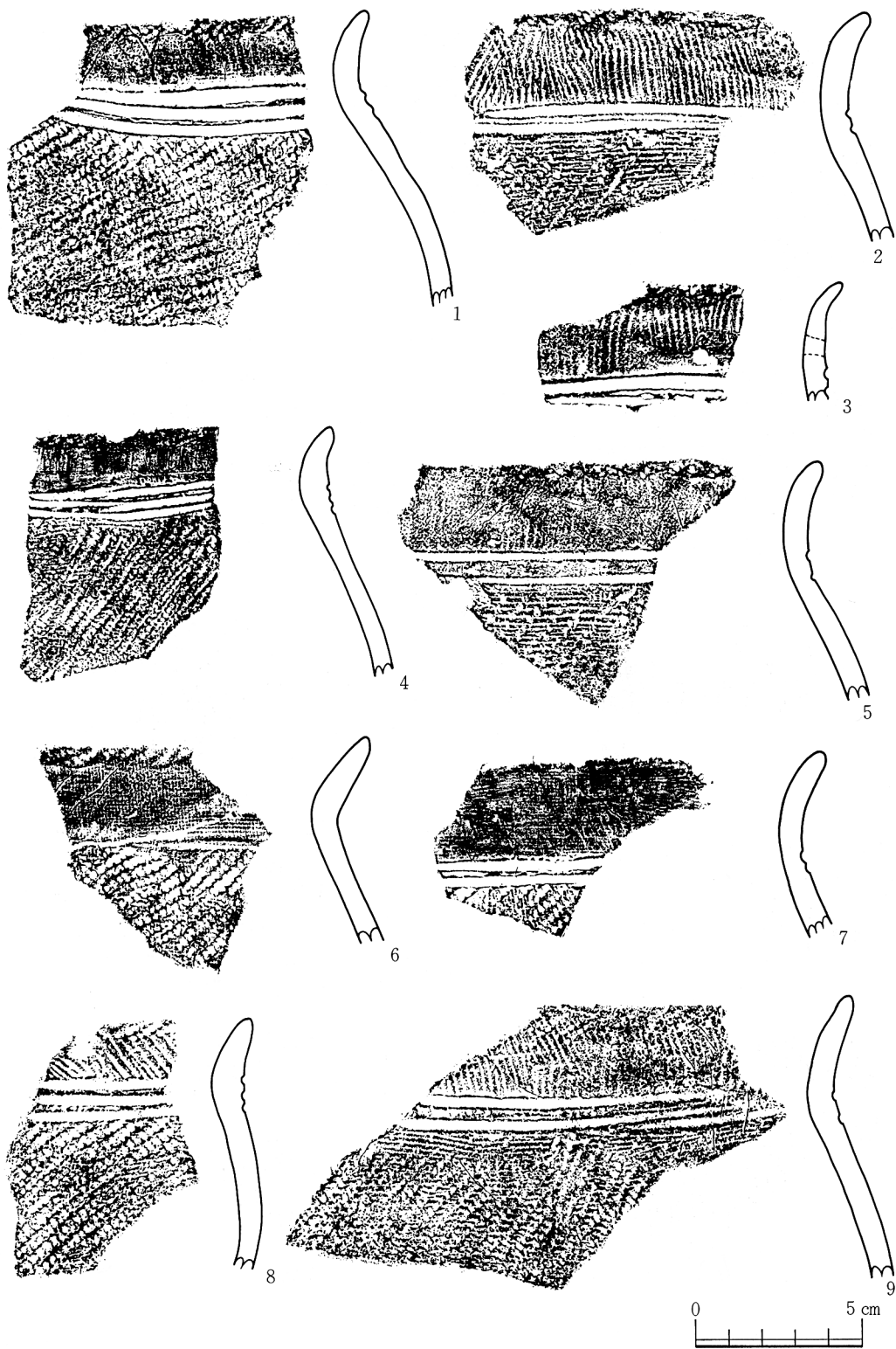
1986（昭和61年）



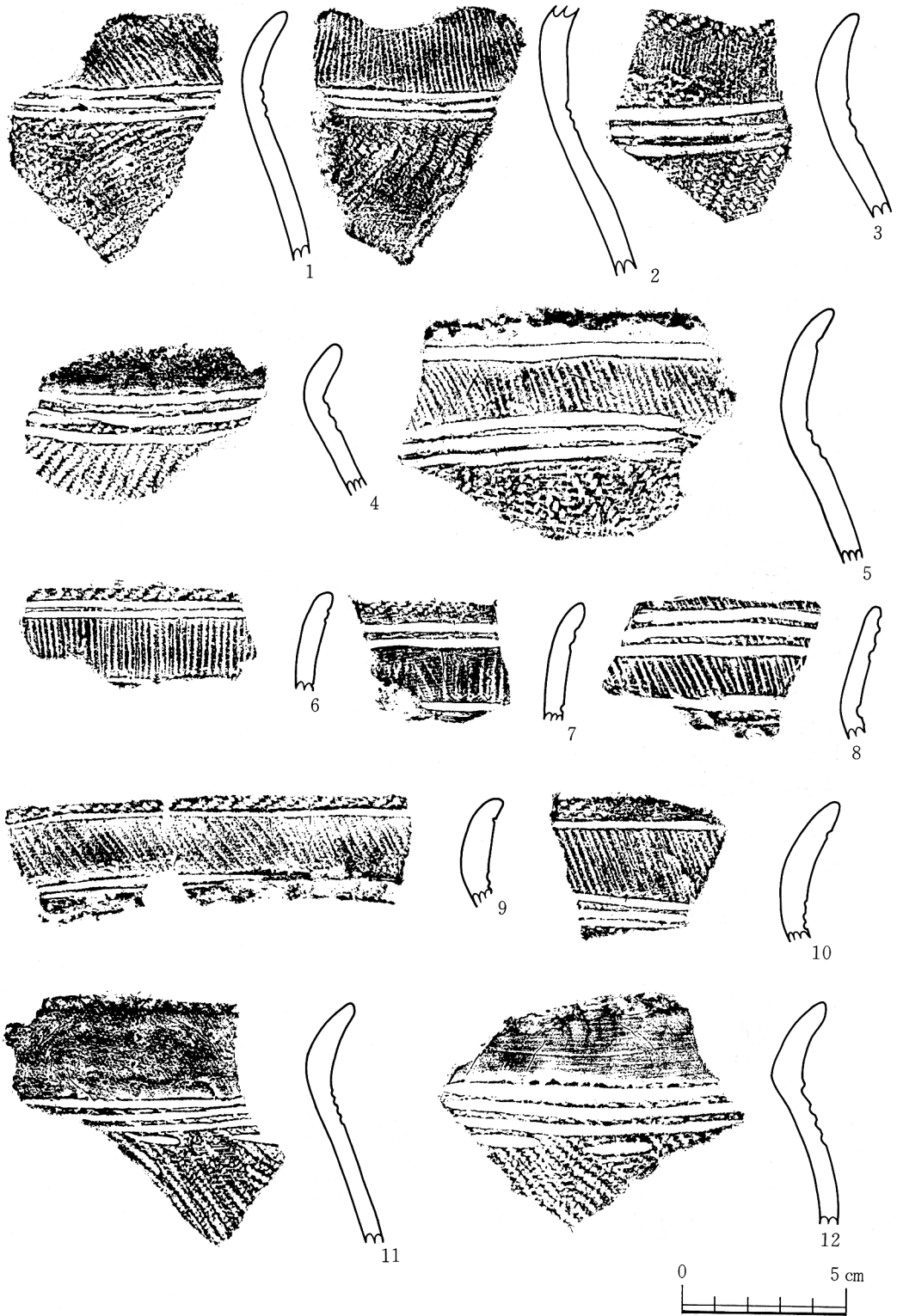
第3図 土 器 I a 類



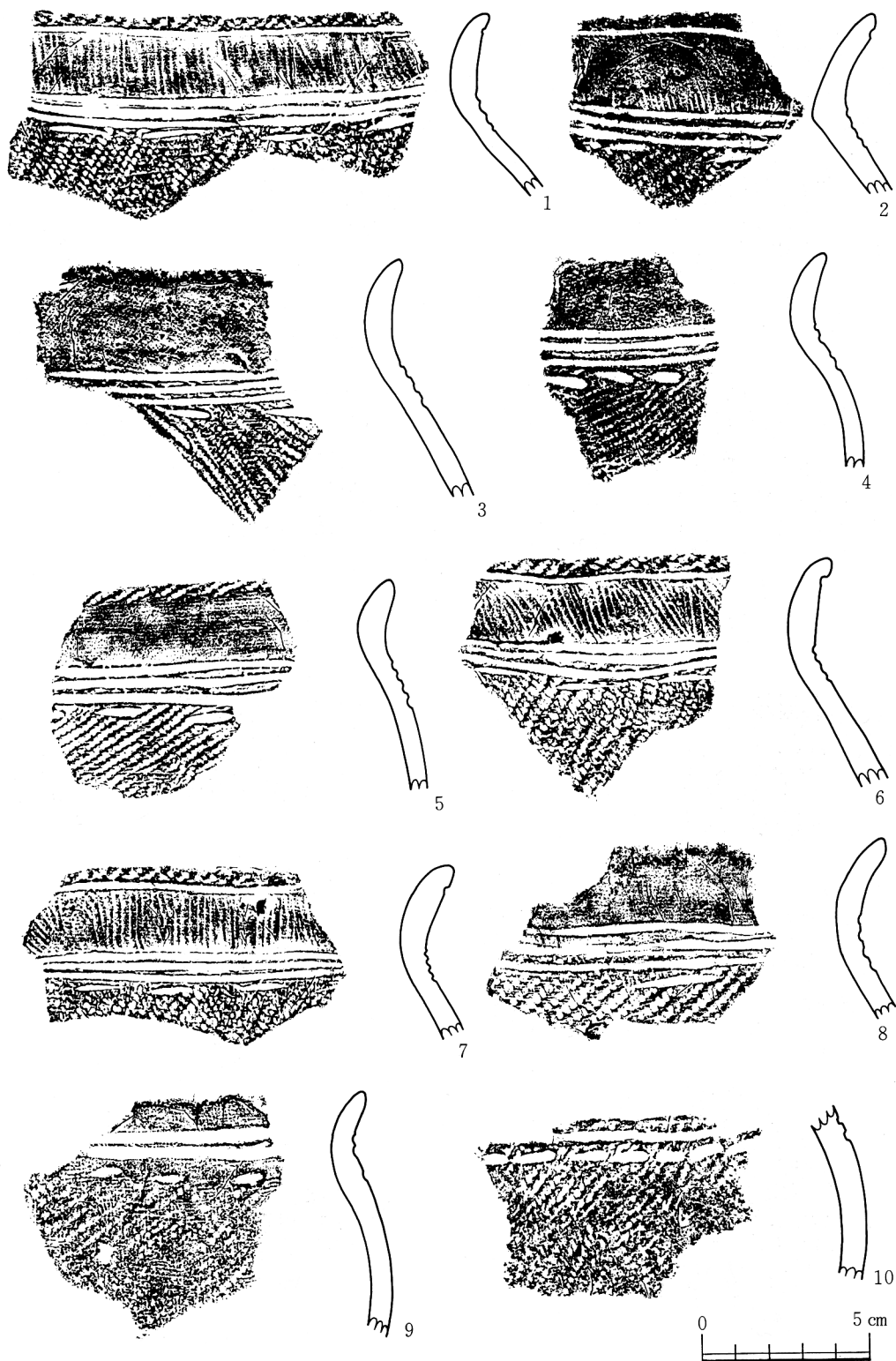
第4図 土 器 I a 類



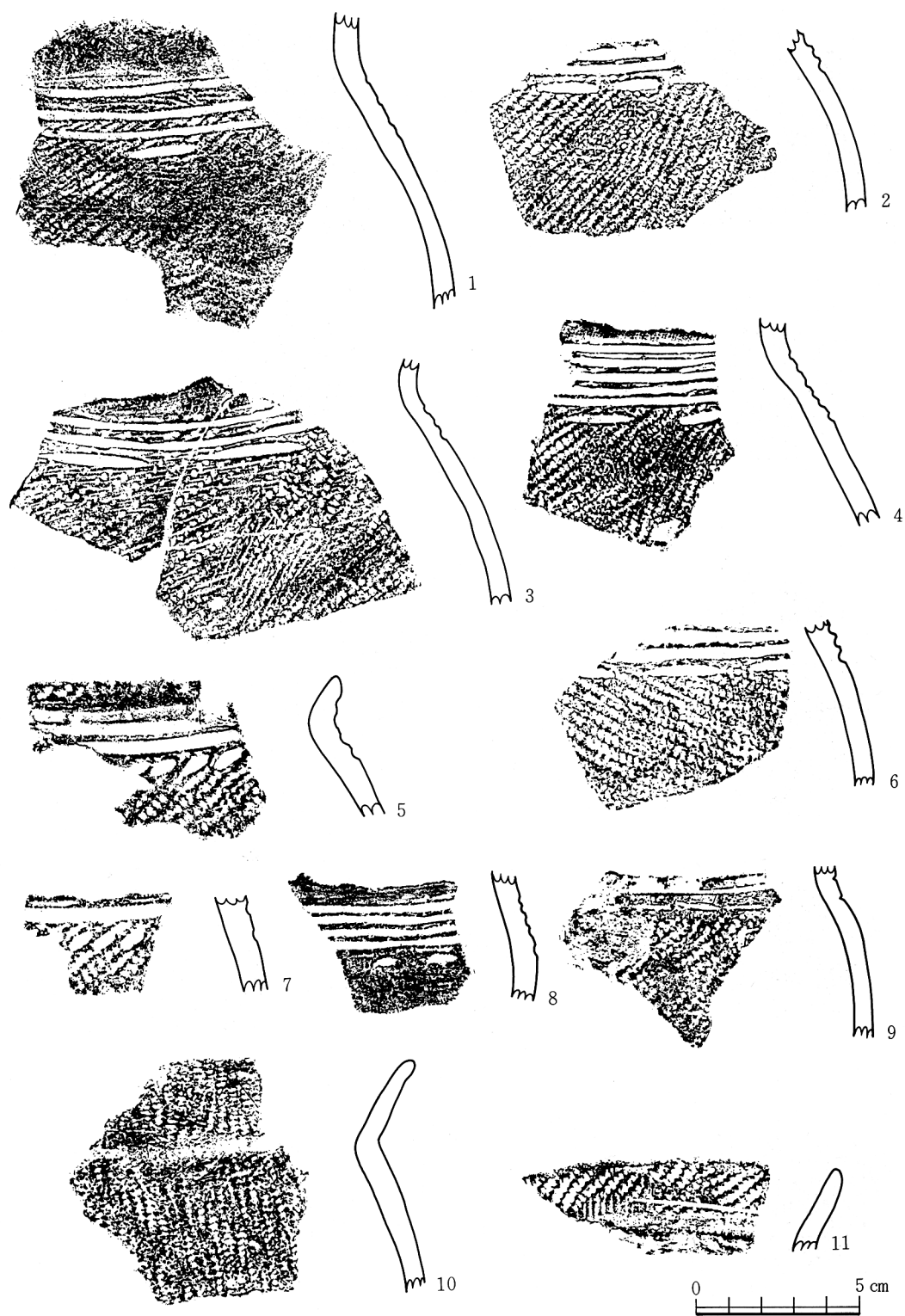
第5図 土 器 I a 類



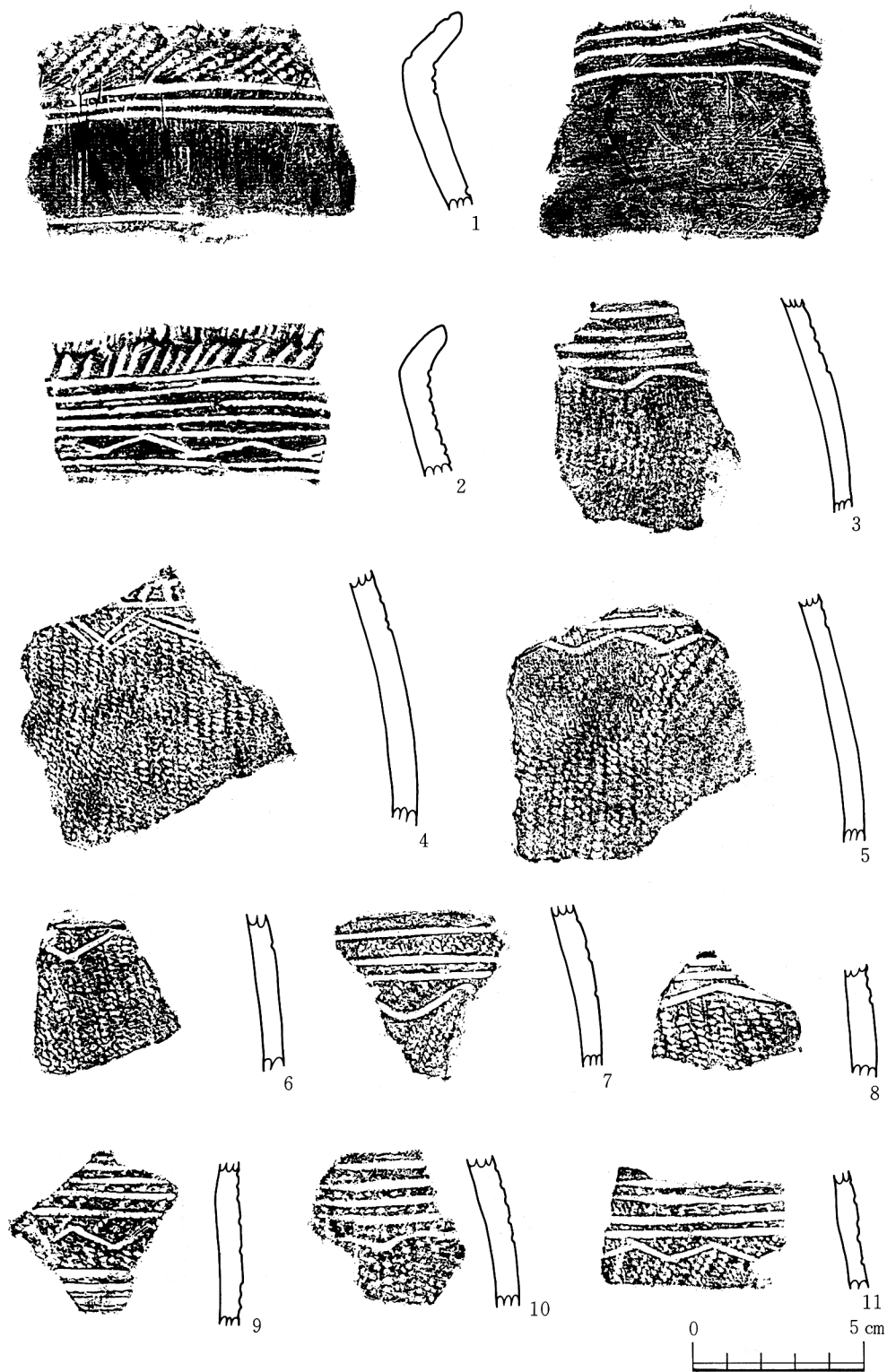
第6図 土 器 I a 類



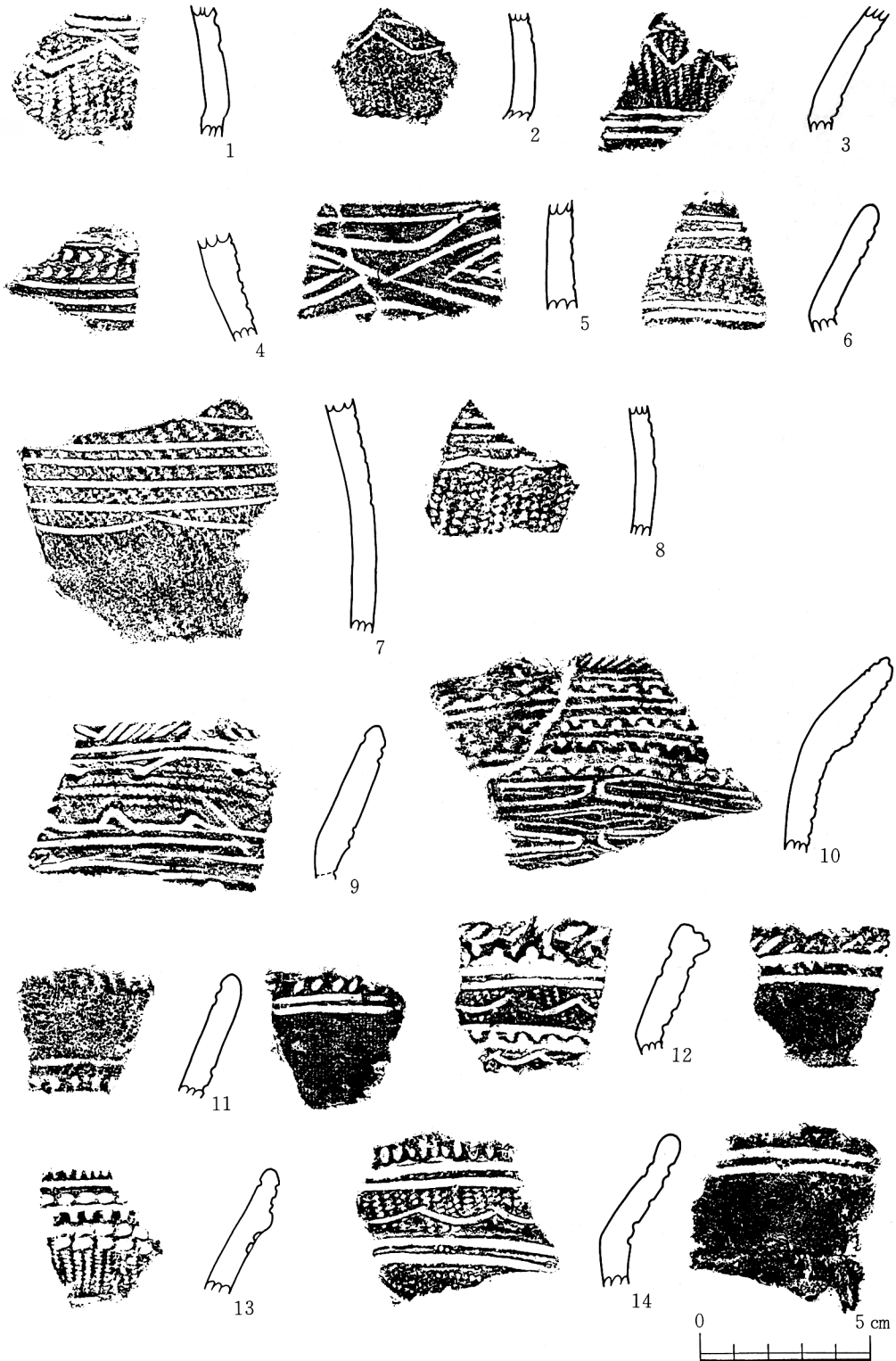
第7図 土 器 I a 類



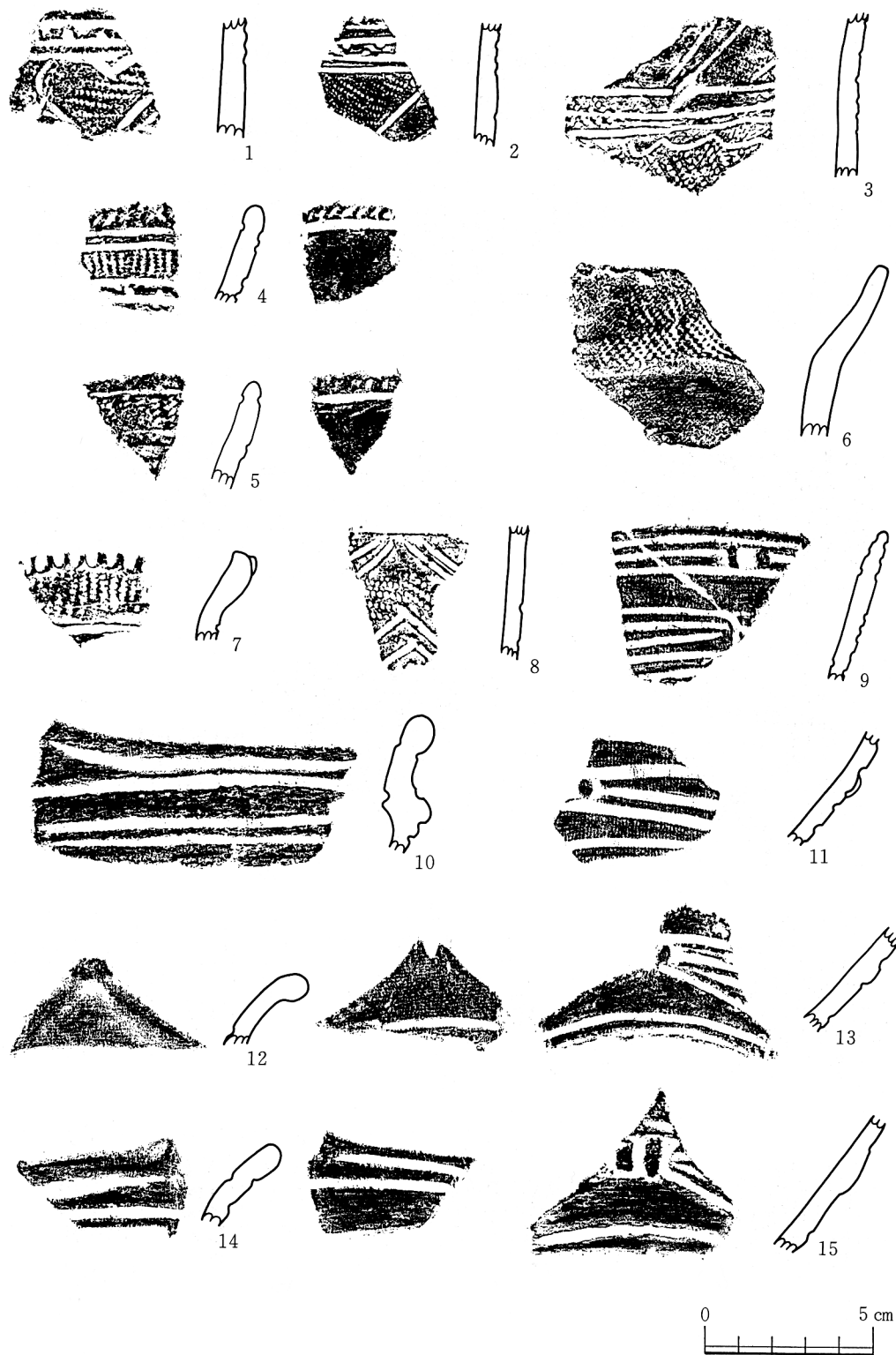
第8図 土 器 1~9, Ia類 10・11, Ib類



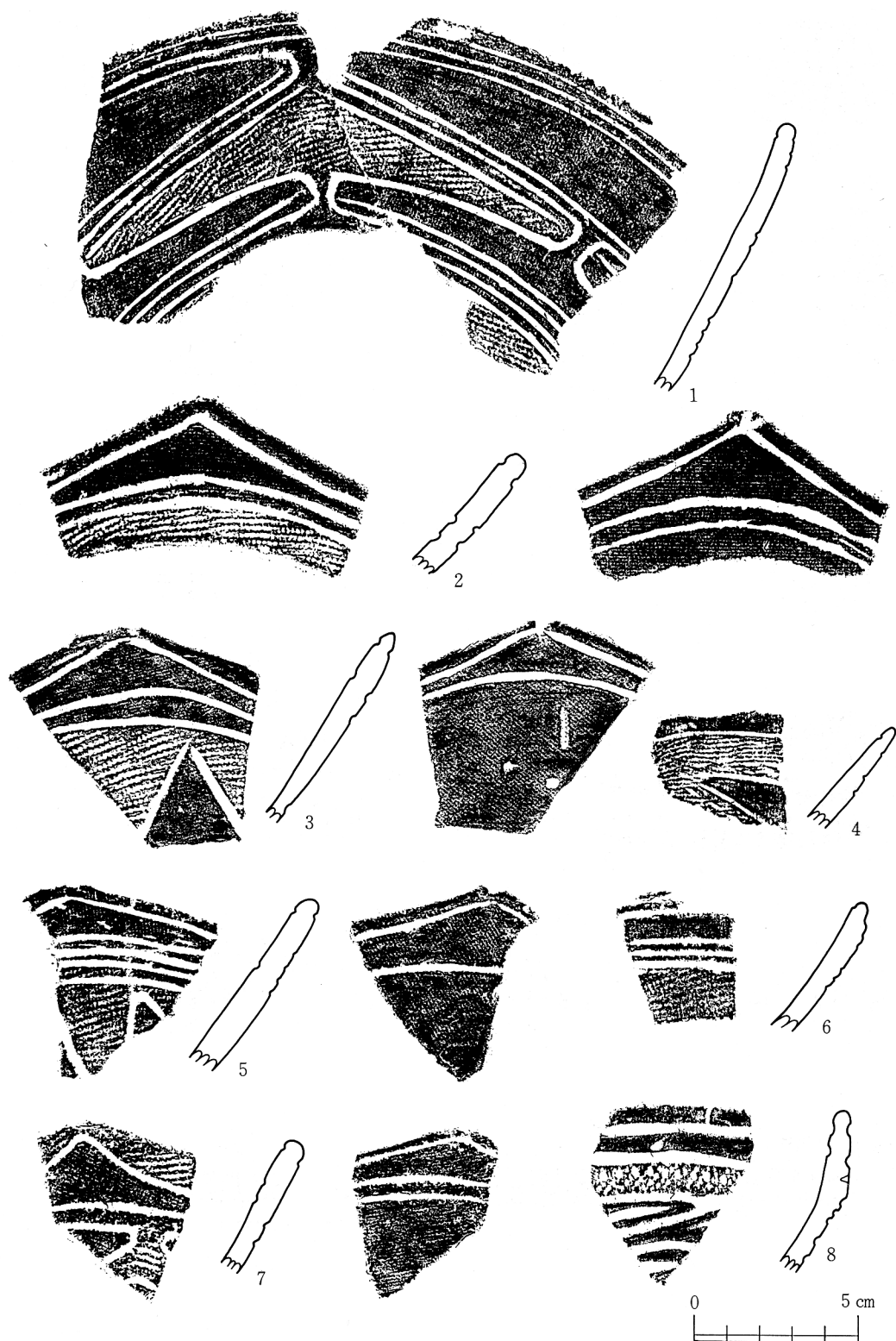
第9図 土 器 I c 類



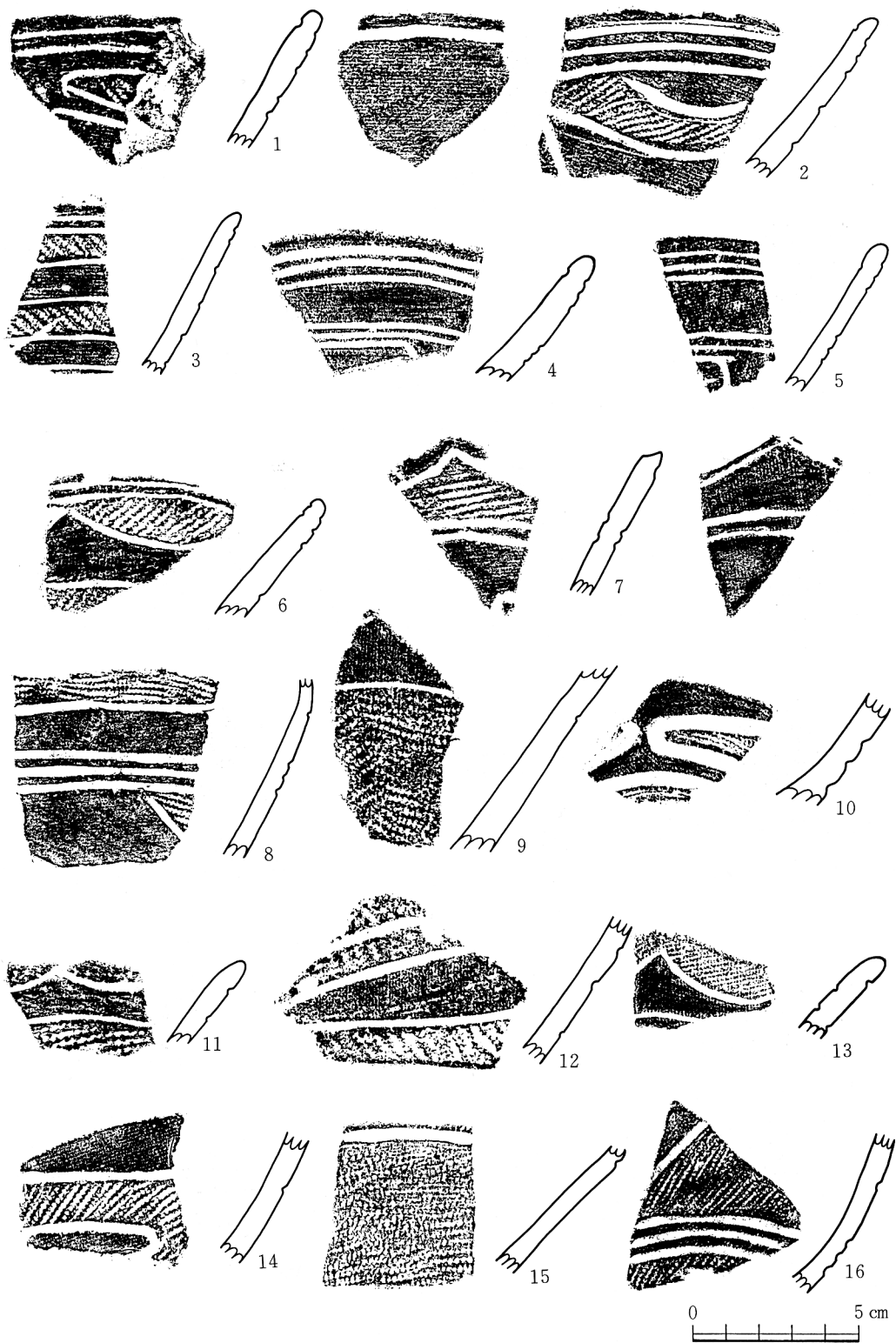
第10図 土 器 1～8, Ic類 9～14, Id類



第11図 土 器 1～8, I d類 9～15, II a類



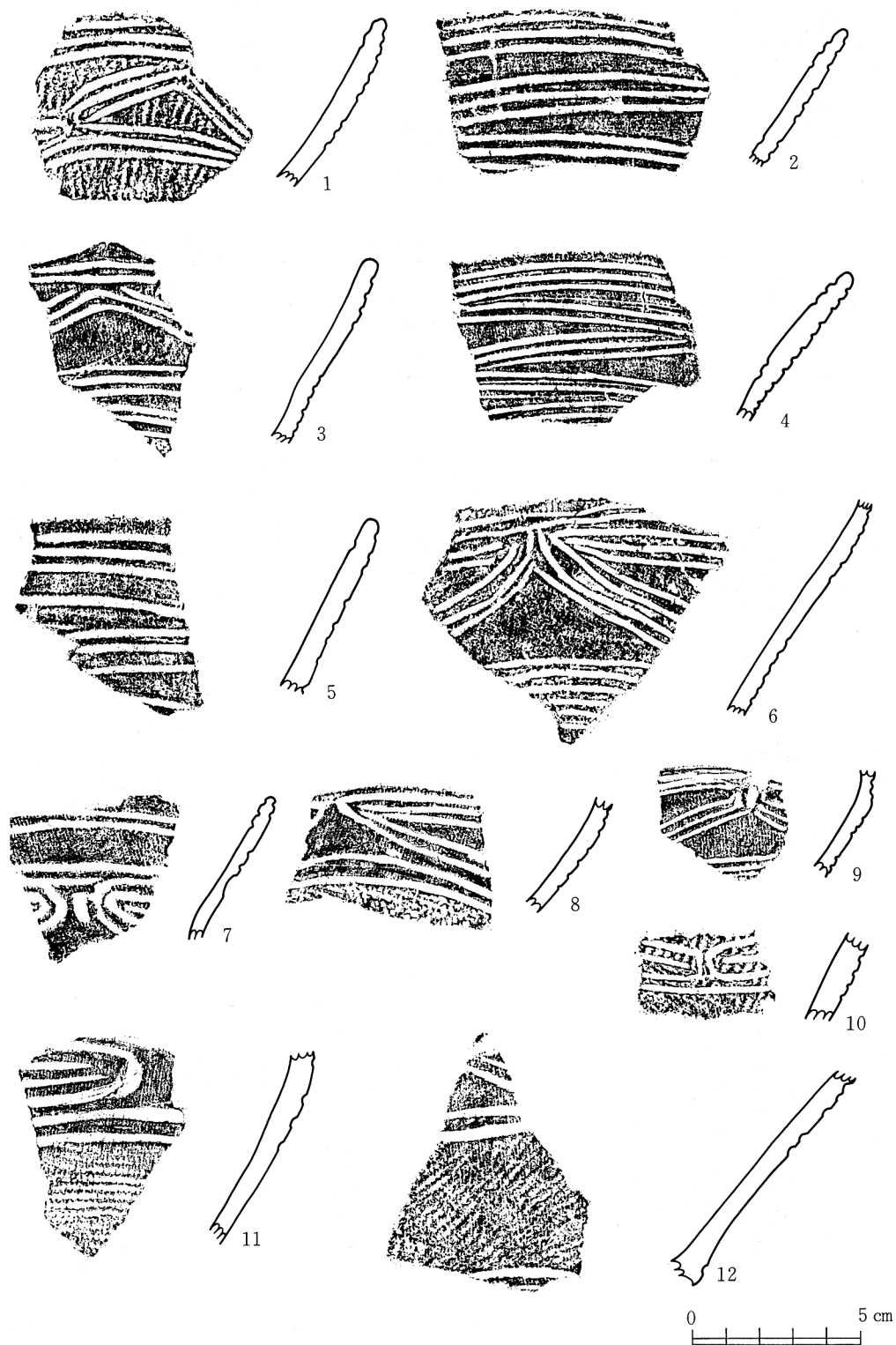
第12図 土 器 II b 類



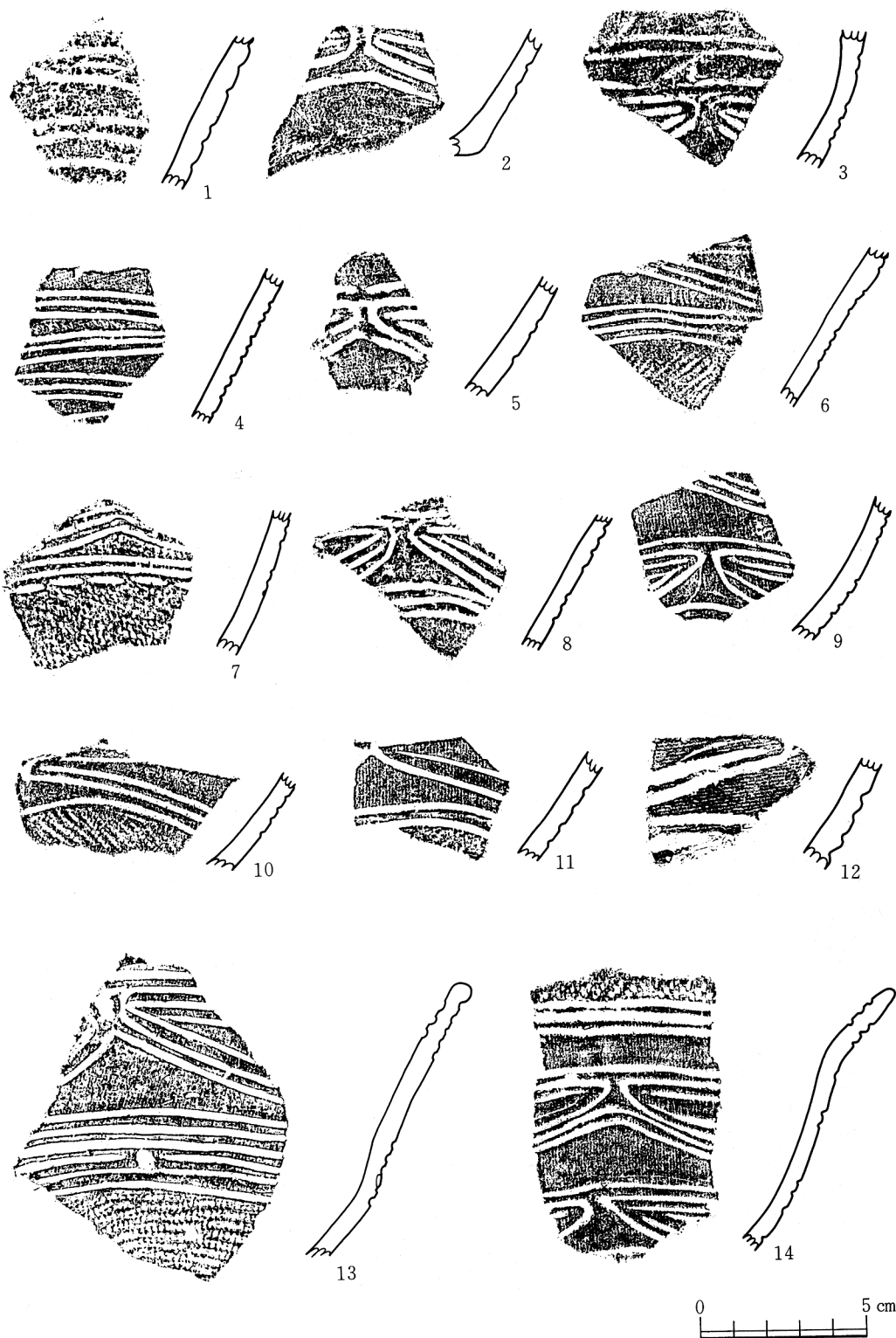
第13図 土 器 II b類



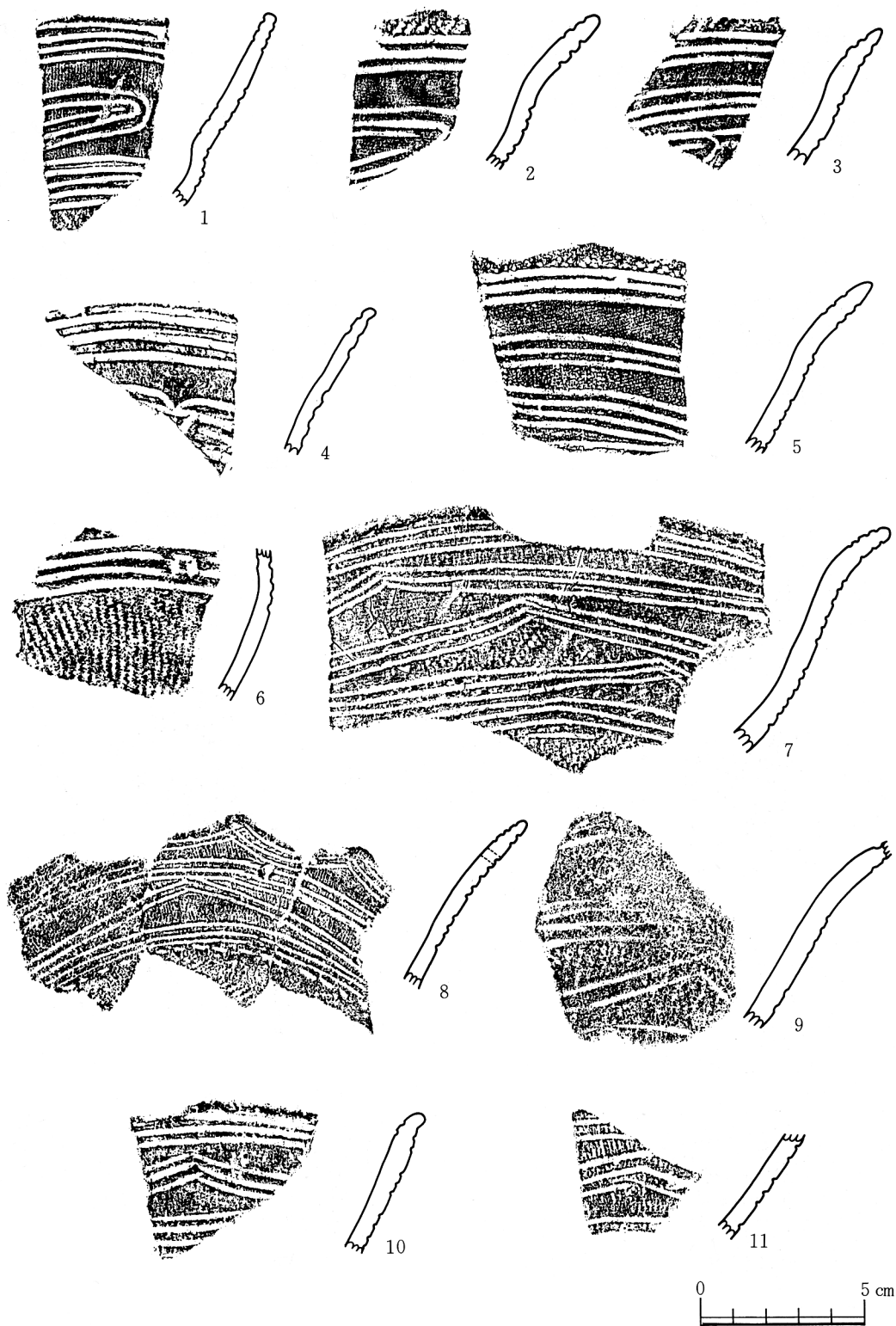
第14図 土 器 1~4, IIb類 5~14, IIc類



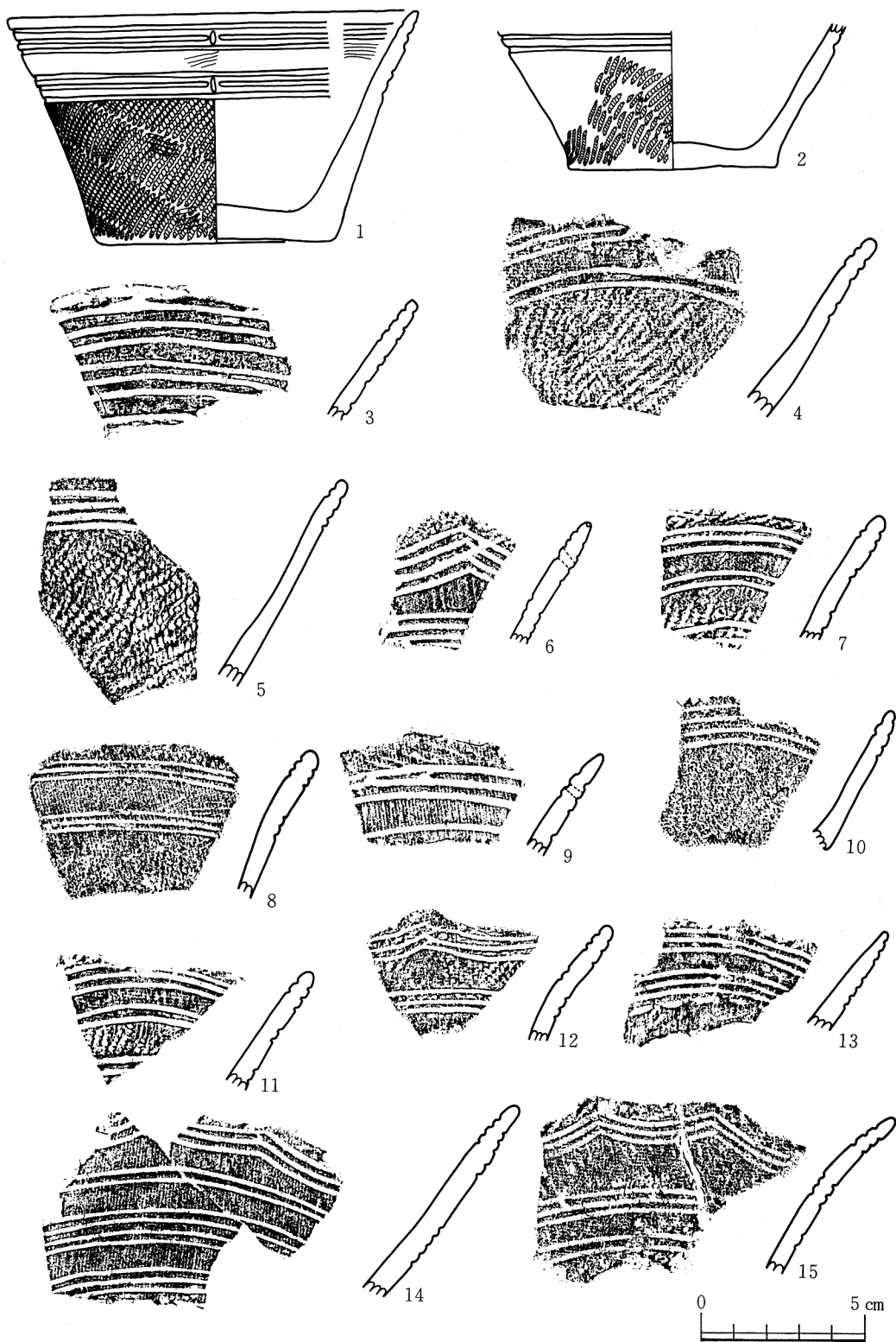
第15図 土 器 IIc類



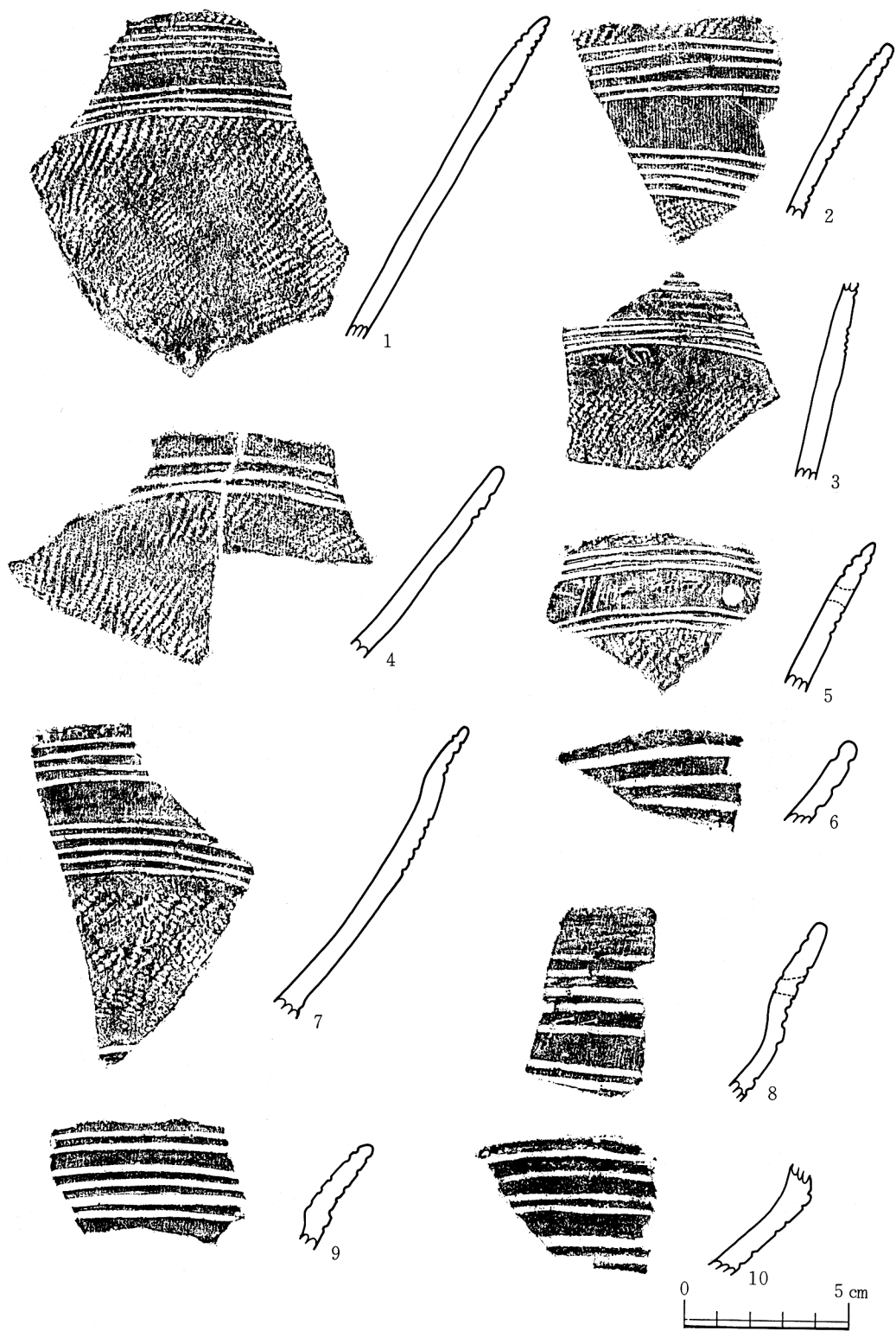
第16図 土 器 1~12, II c類 13・14, II d類



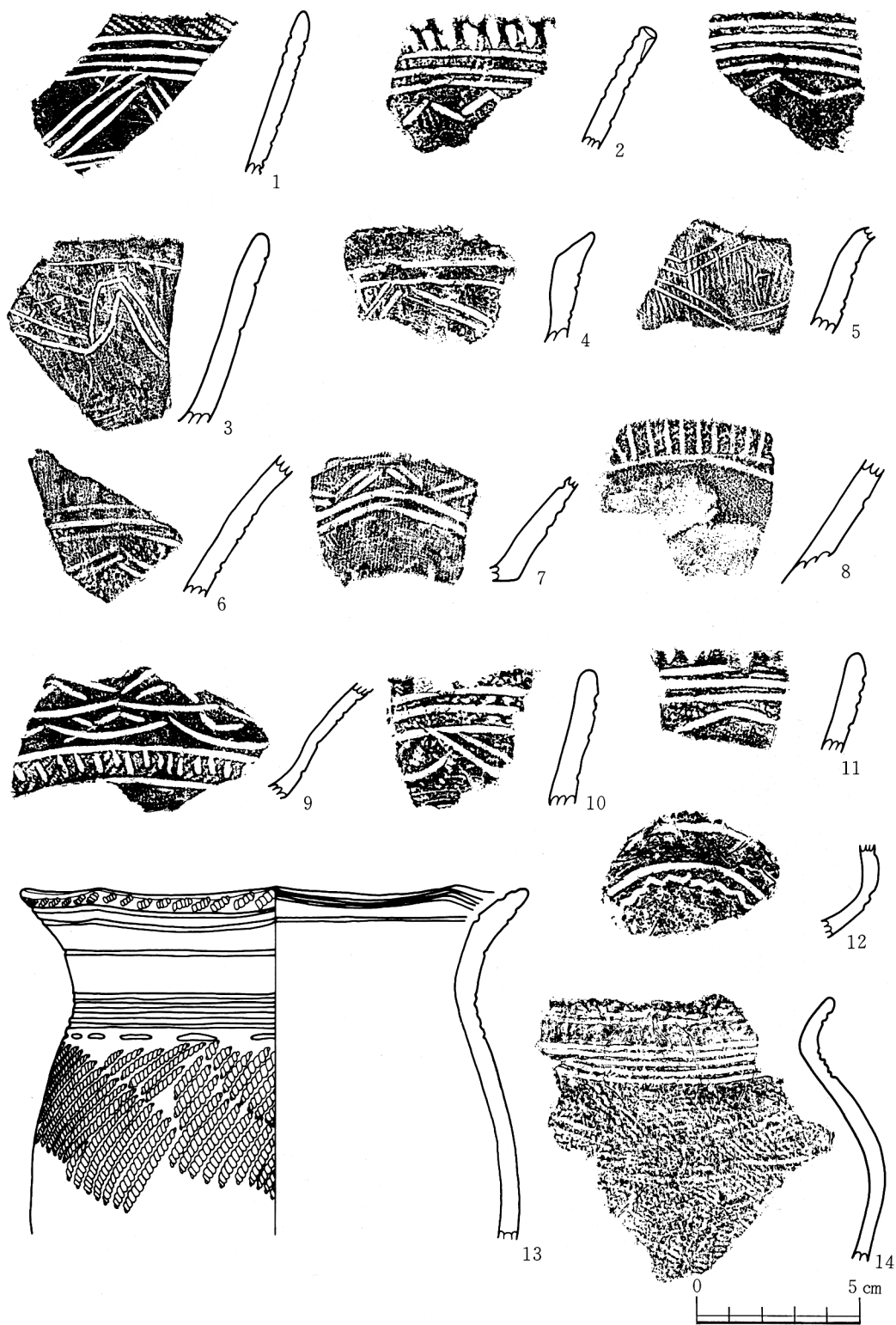
第17図 土 器 1~6, II d類 7~11, II e類



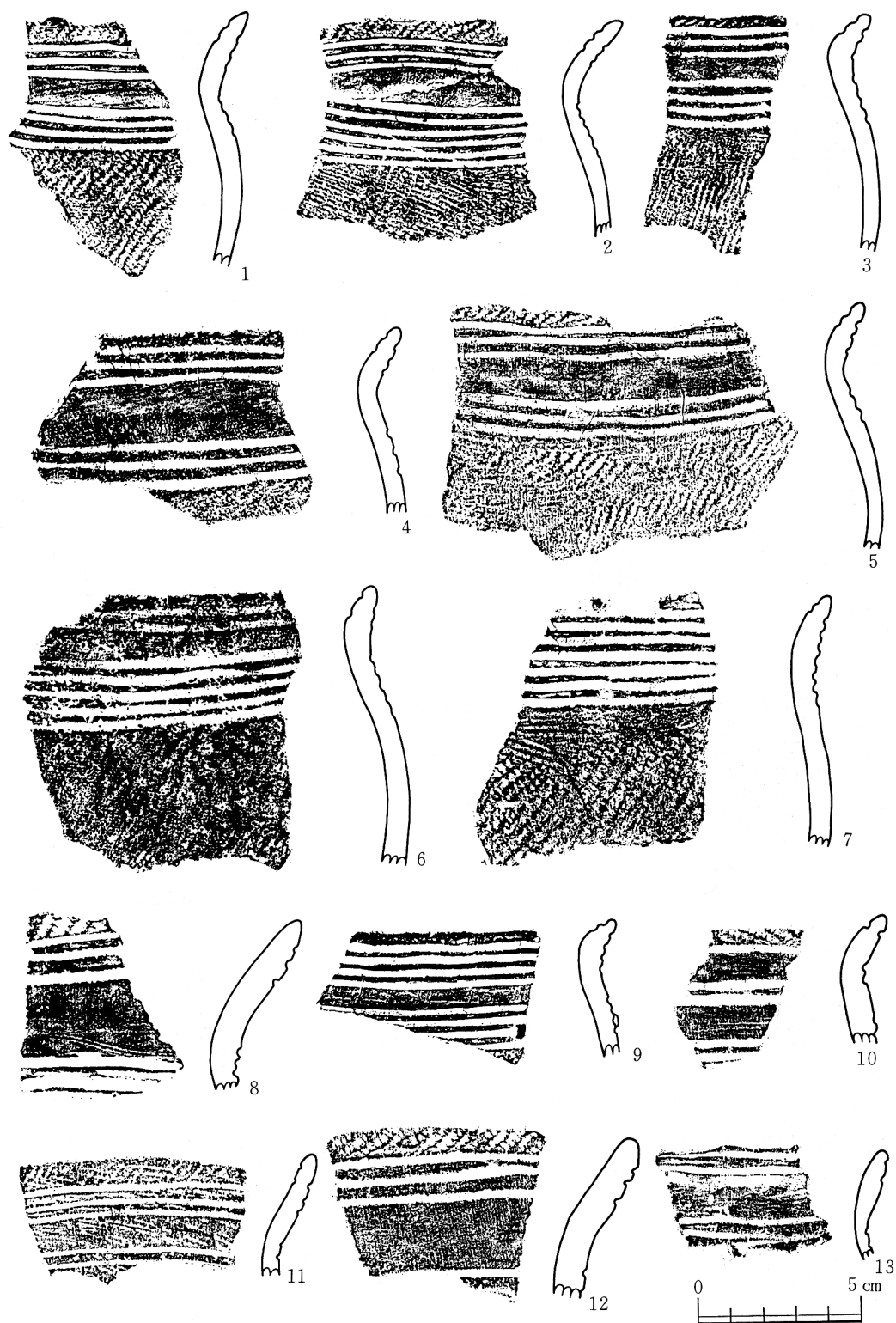
第18図 土 器 II f 類



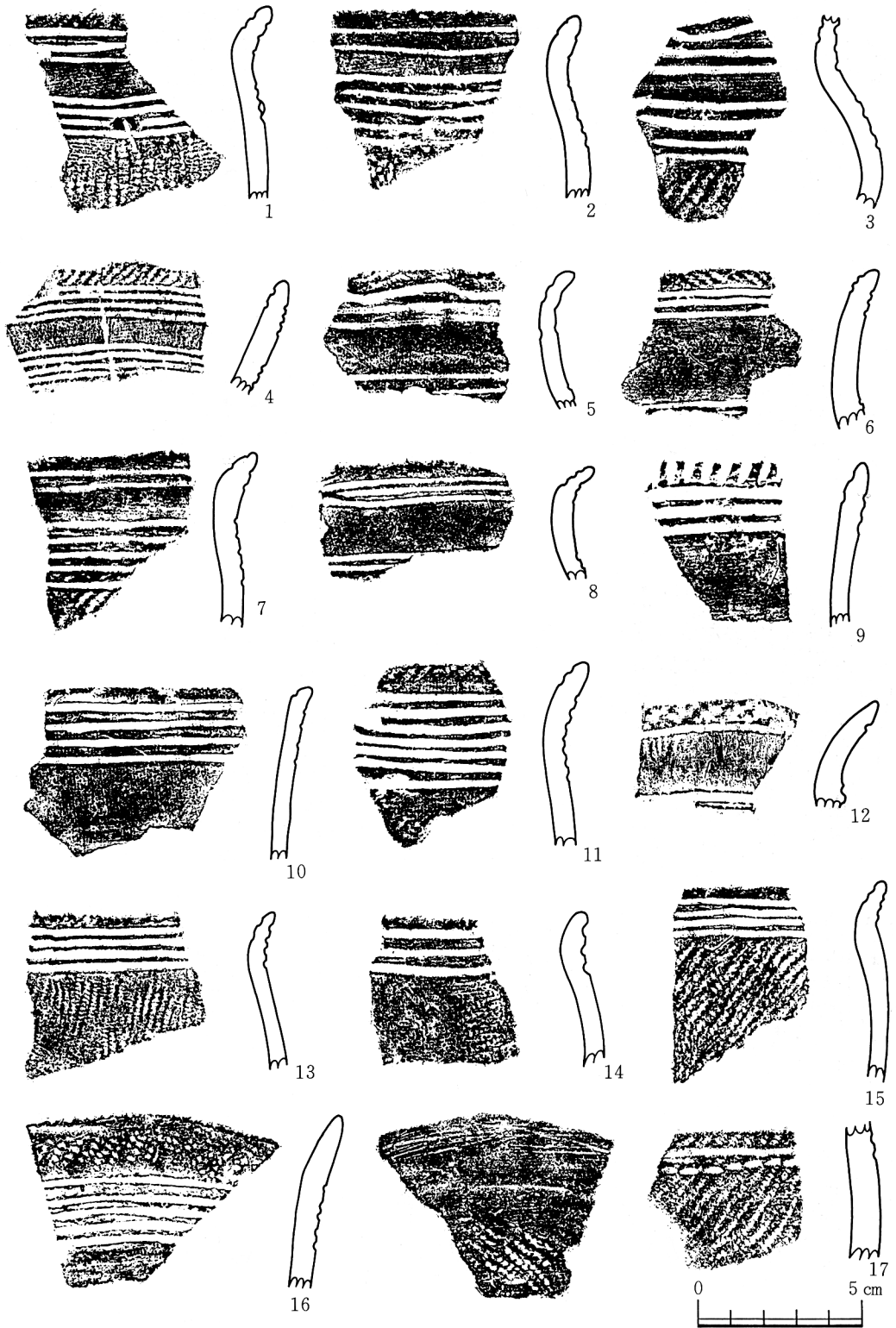
第19図 土 器 1~6, II f類 7~10, II g類



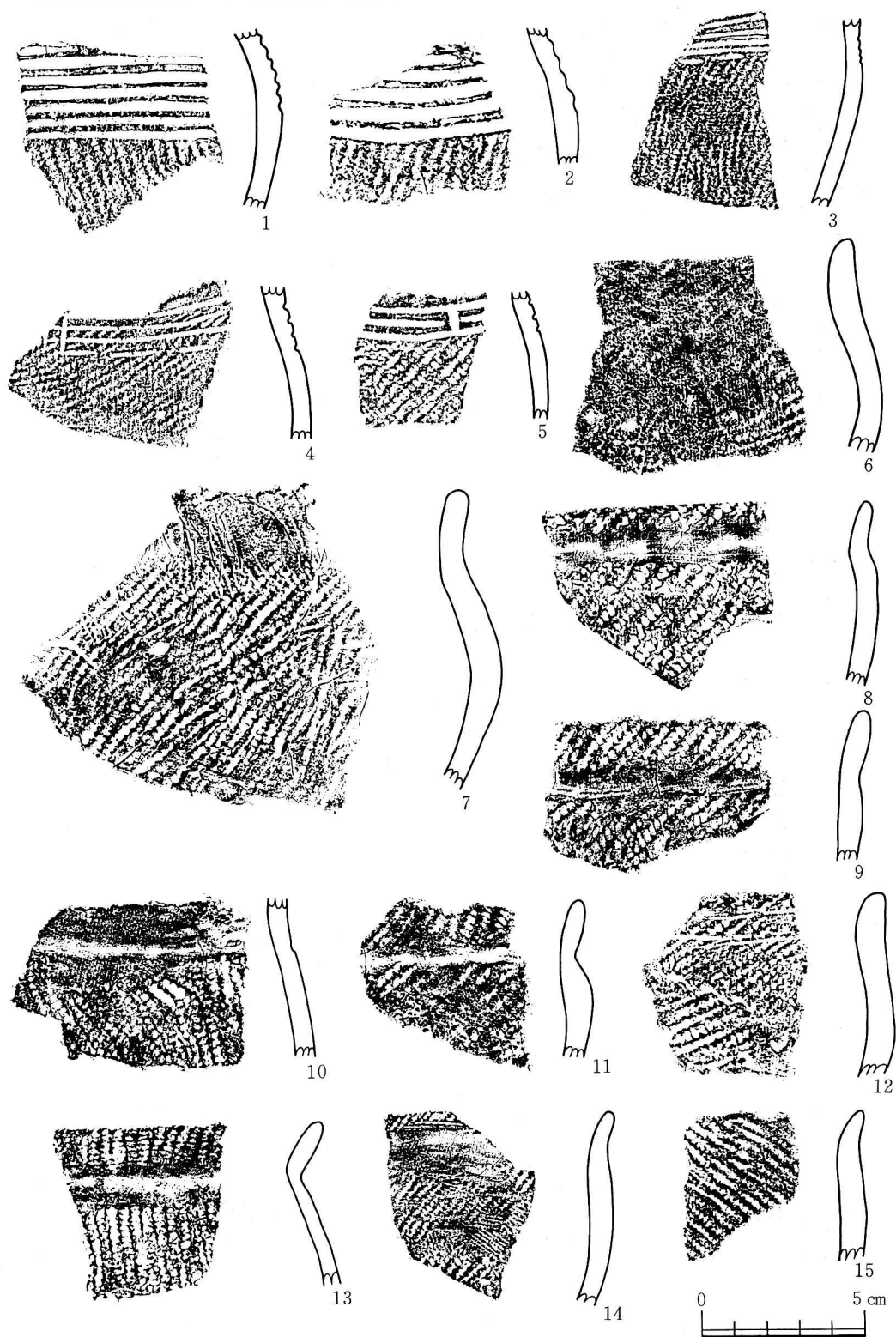
第20図 土 器 1~12, II h類 13・14, II i類



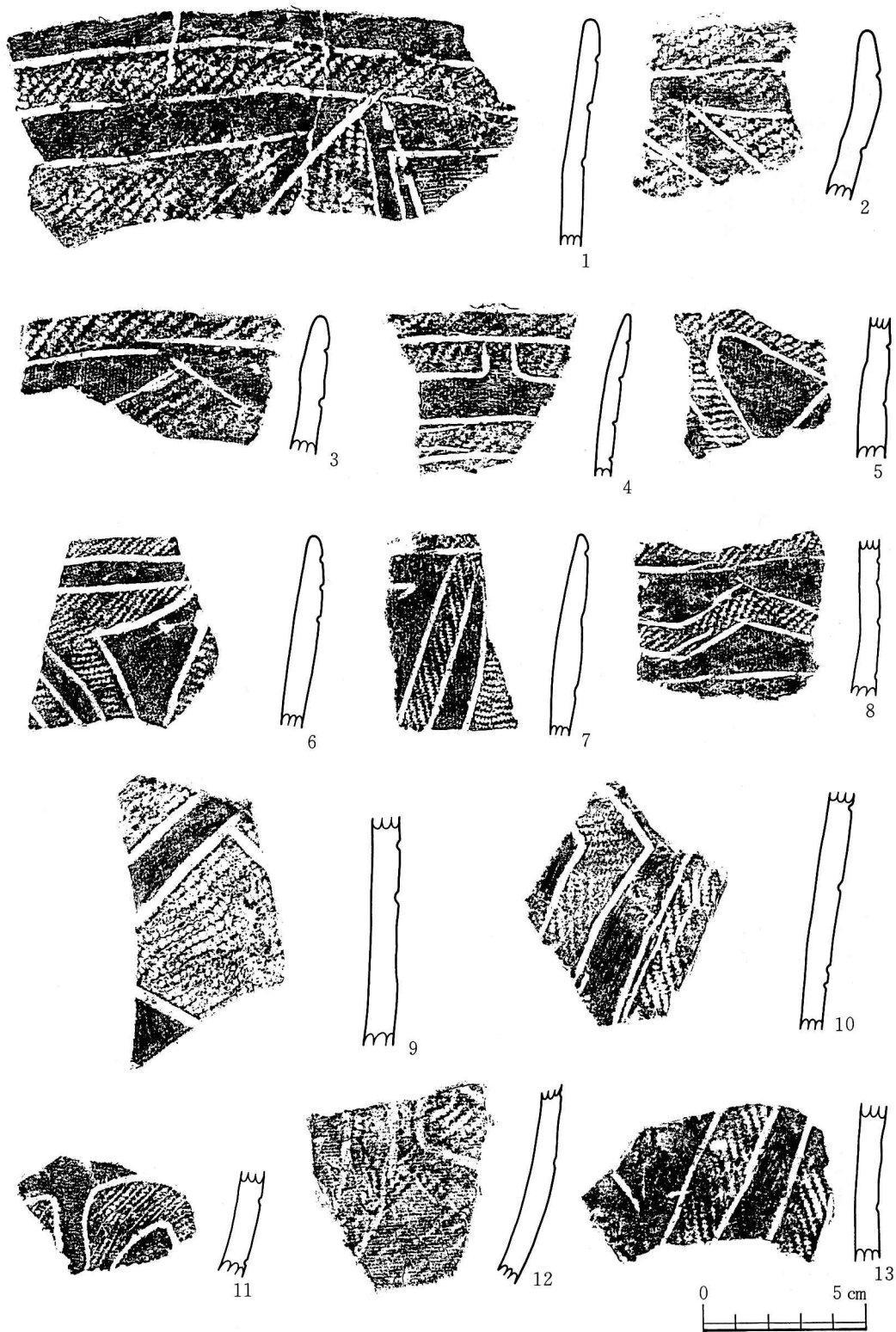
第21図 土 器 II i類



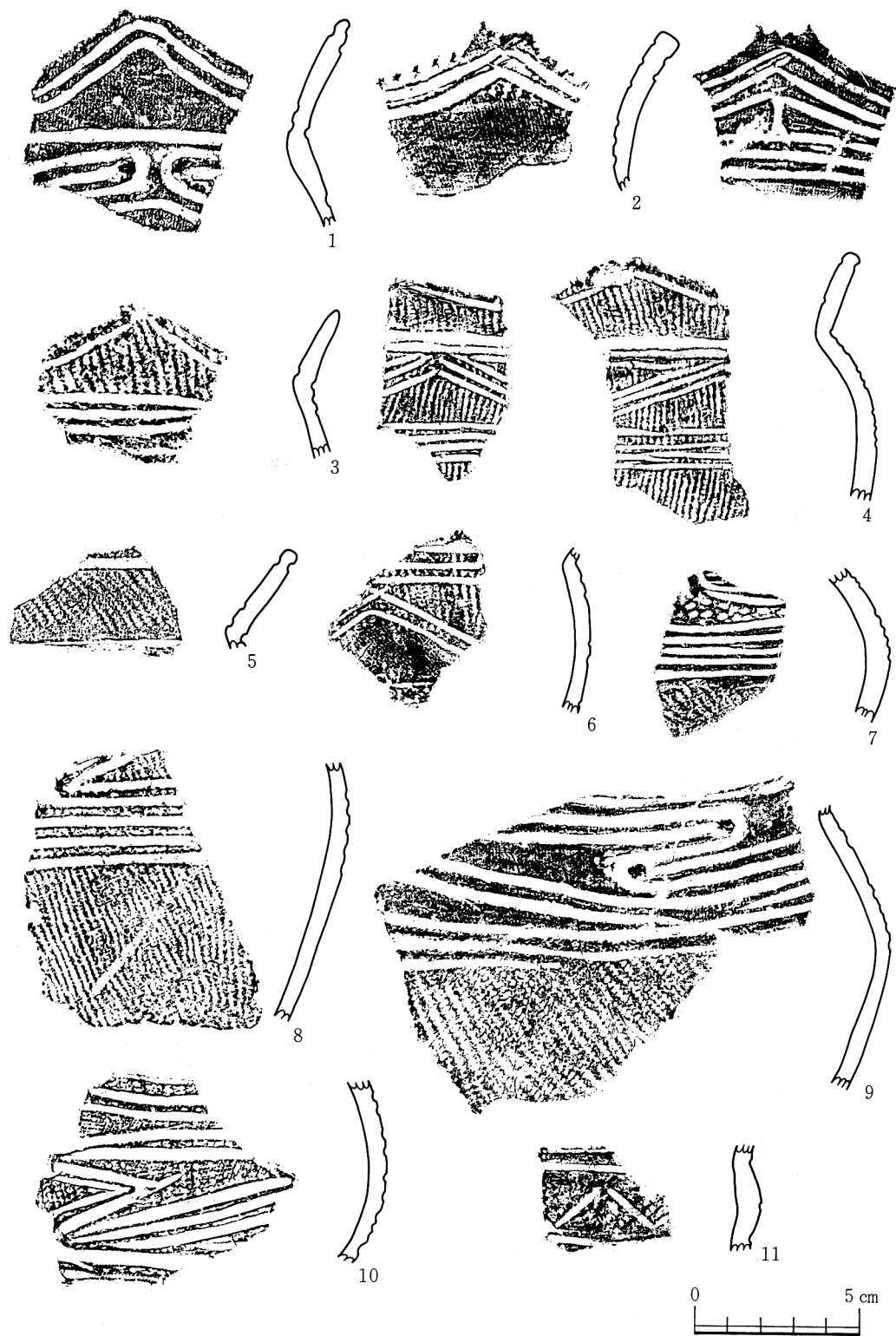
第22図 土 器 II i 類



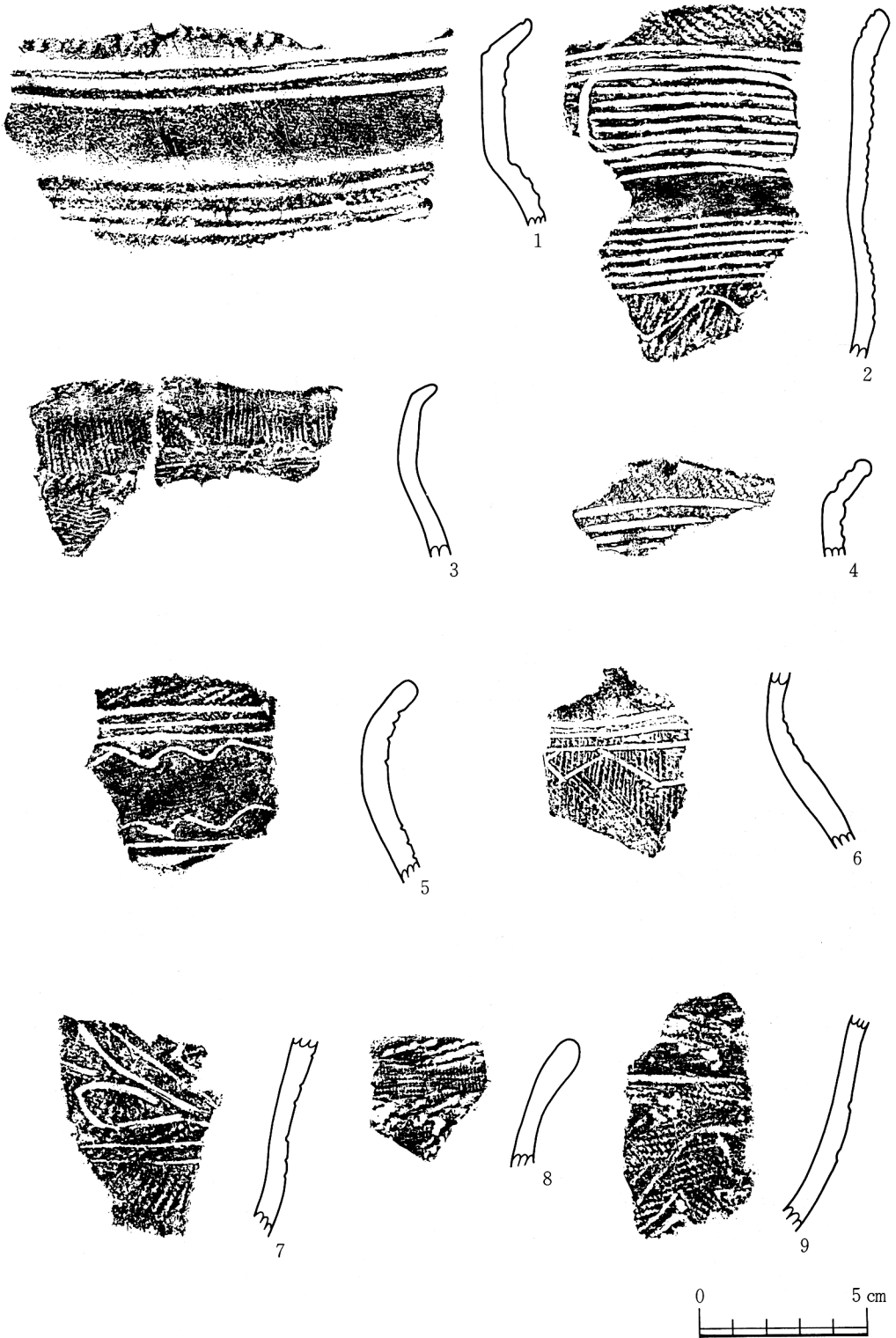
第23図 土 器 1~5, II i類 6~15, II j類



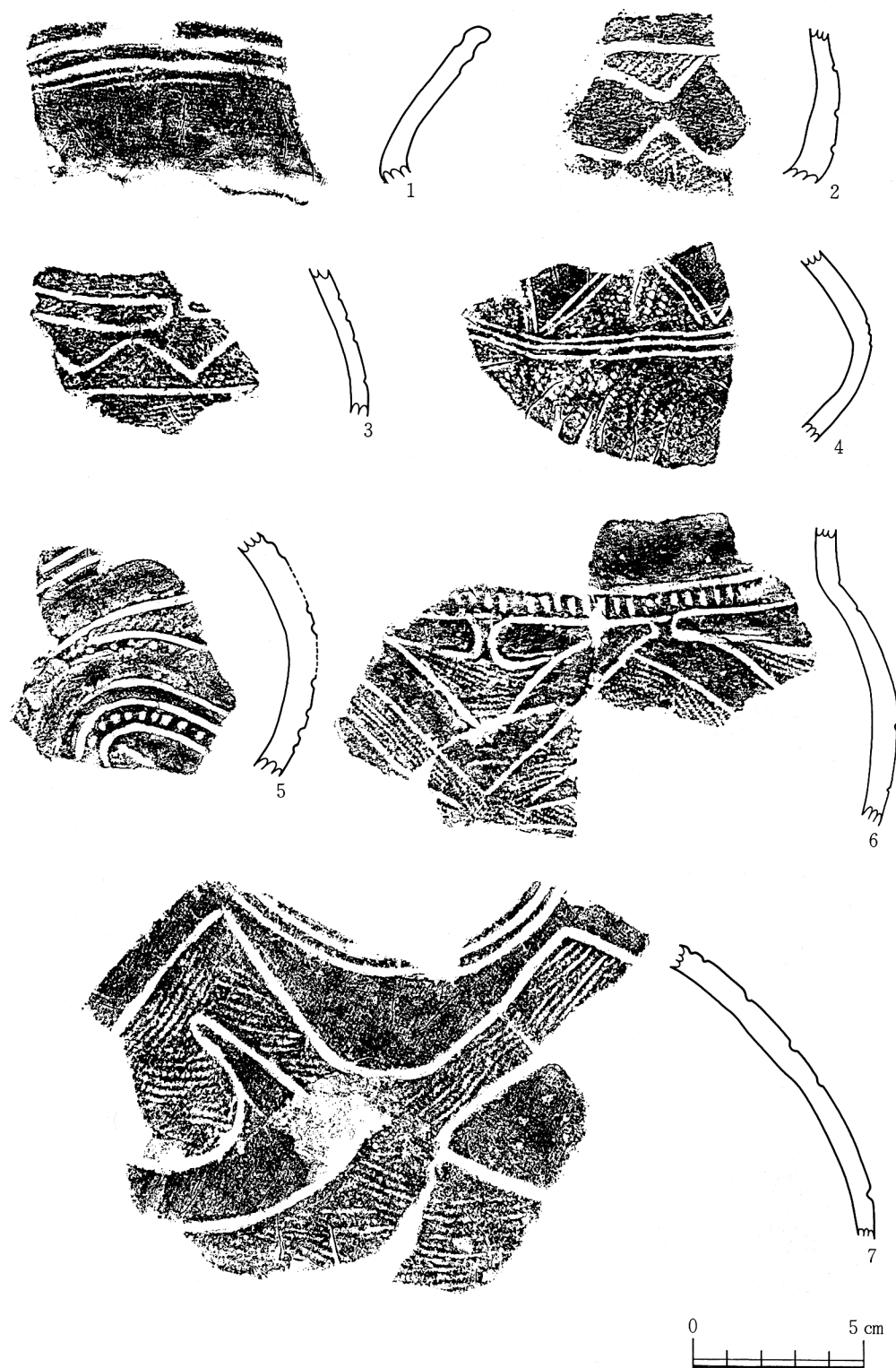
第24図 土 器 II k 類



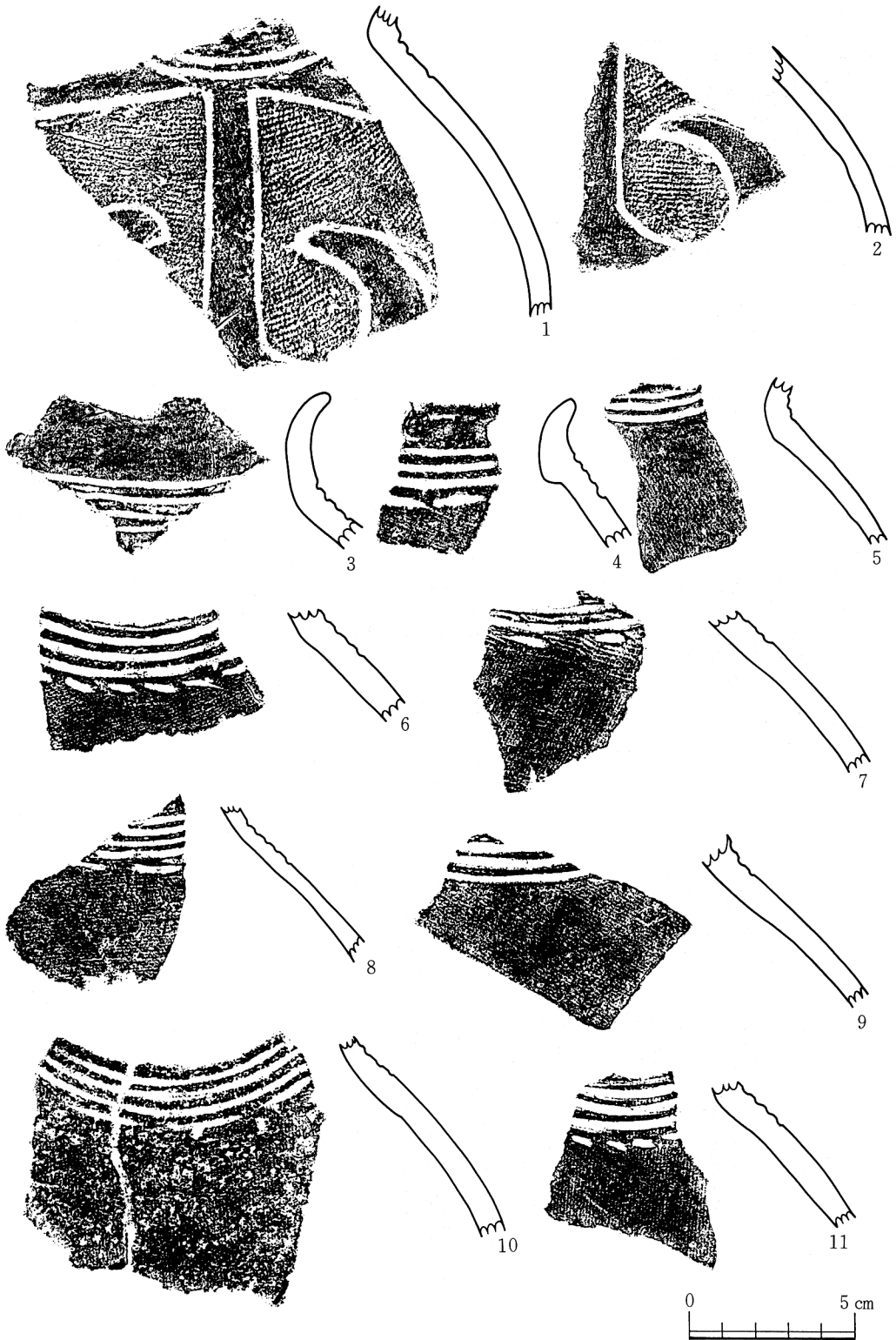
第25図 土 器 1~10, II ℓ 類 11, II m類



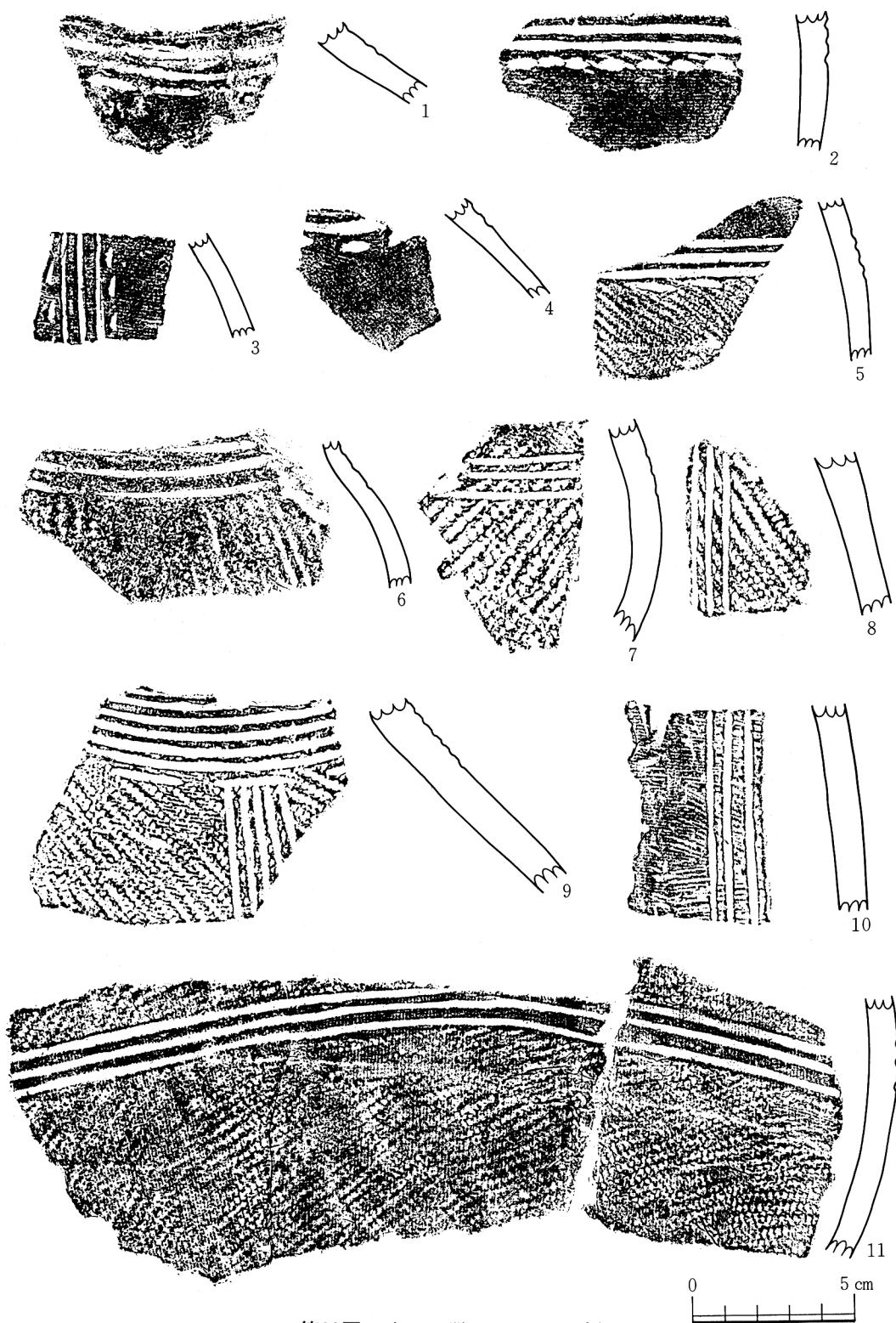
第26図 土 器 1~4, II n類 5・6, II o類 7~9, II p類



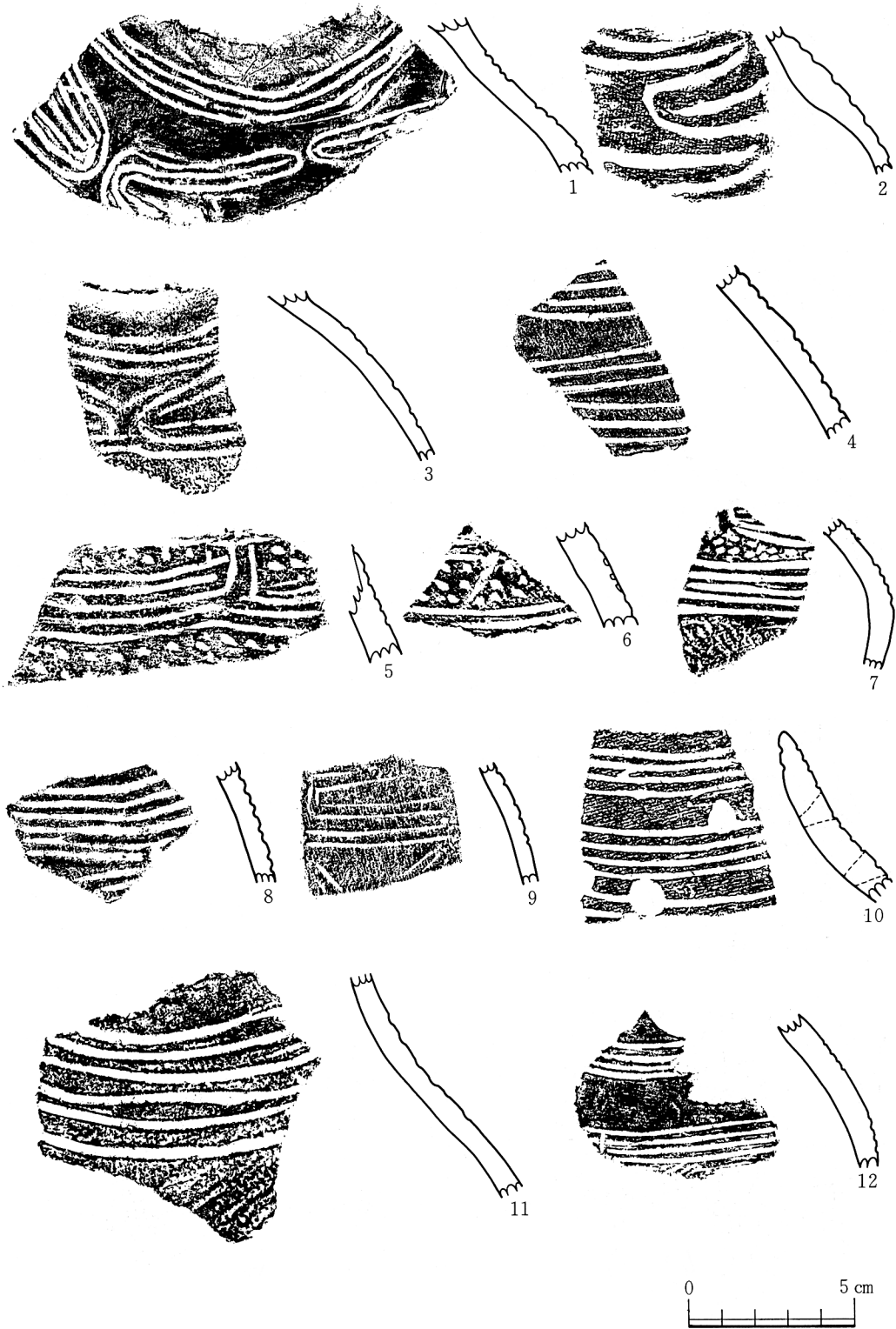
第27図 土 器 1, IIIa類 2~7, IIIb類



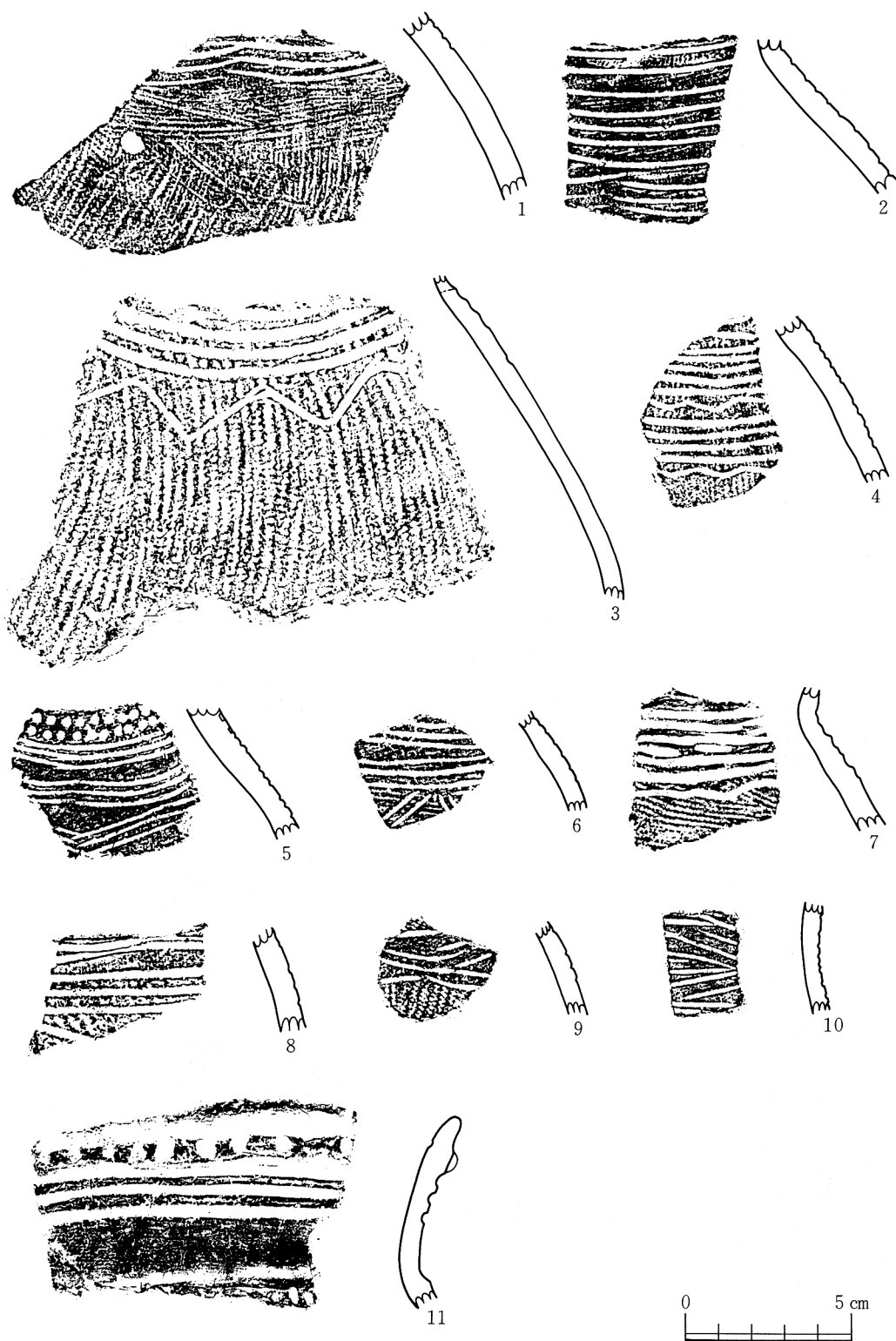
第28図 土 器 1・2, IIIb類 3~11, IIIc類



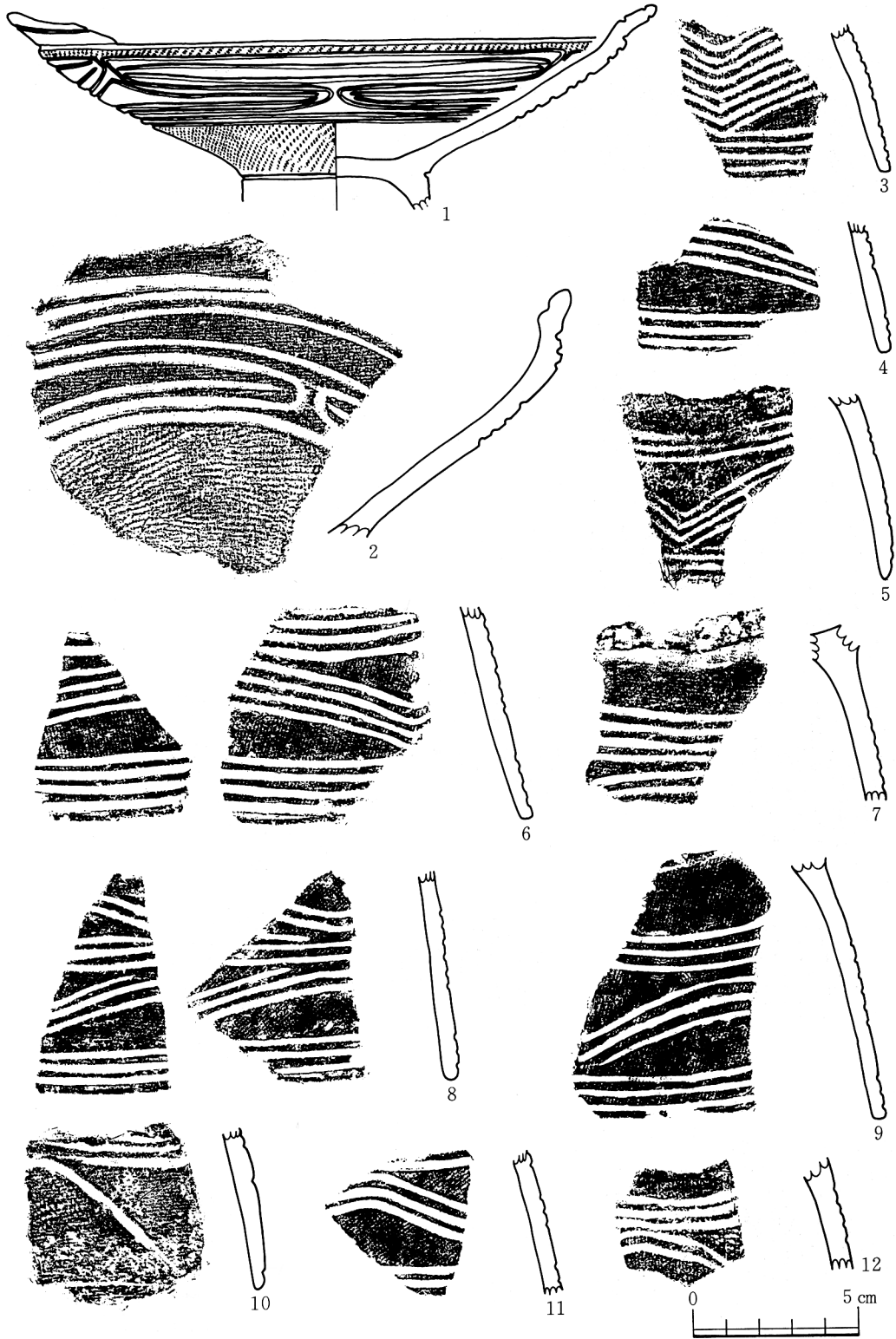
第29図 土 器 III c 類



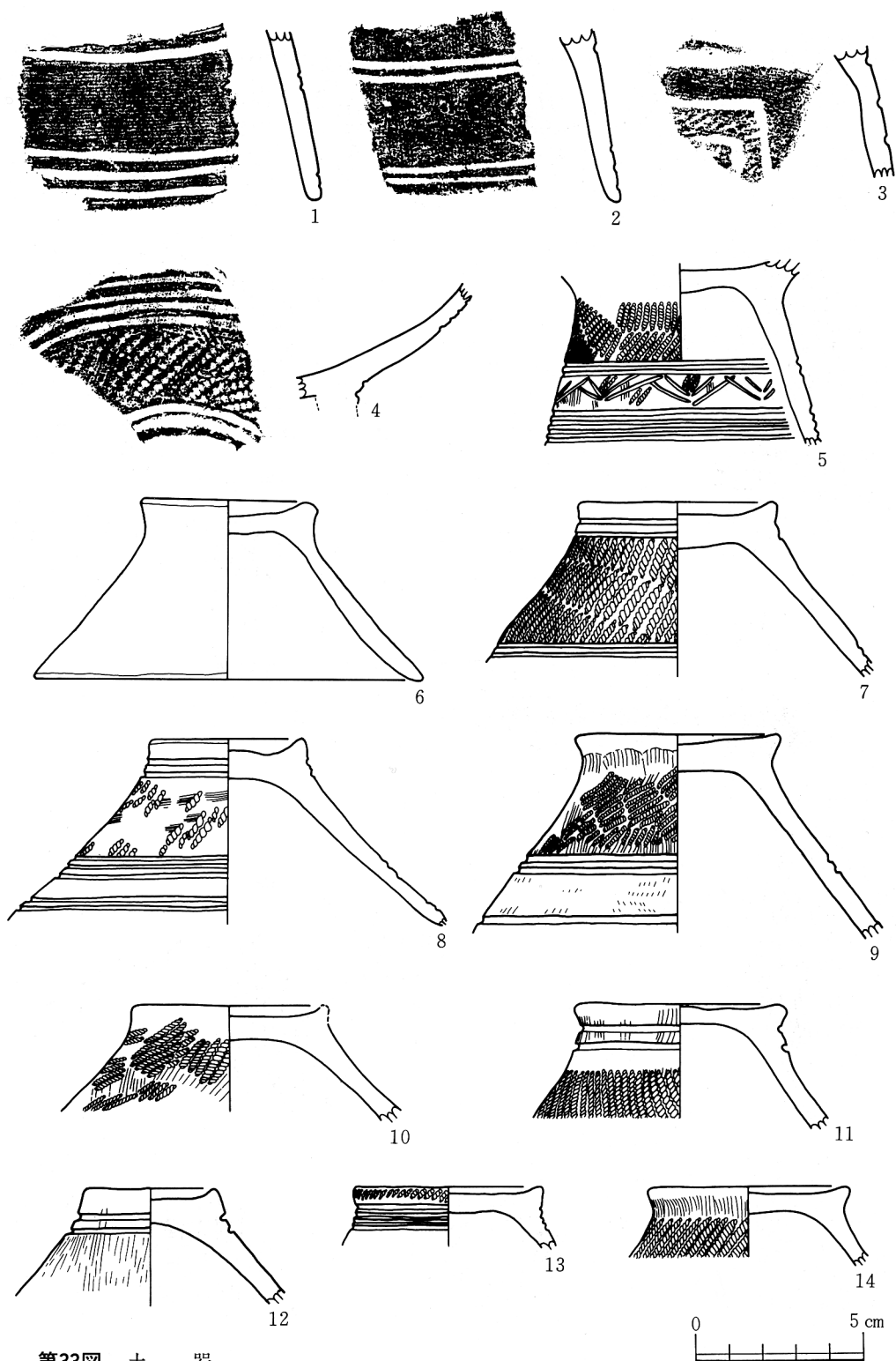
第30図 土 器 1～9, III d類 10, III e類 11・12, III f類



第31図 土 器 1・2, III f類 3~10, III g類 11, III h類

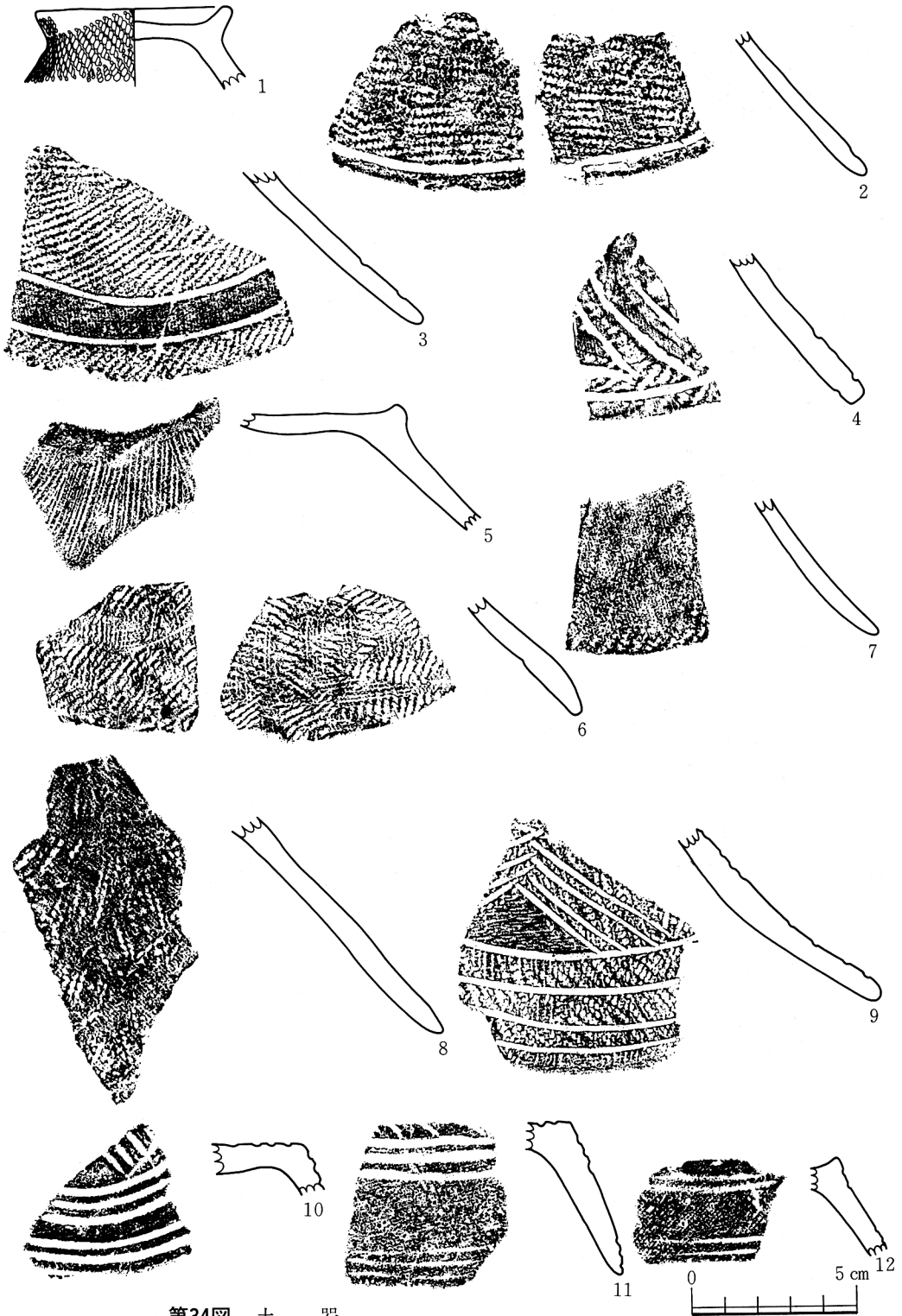


第32図 土 器 1・2, IV a類 3~12, IV c類



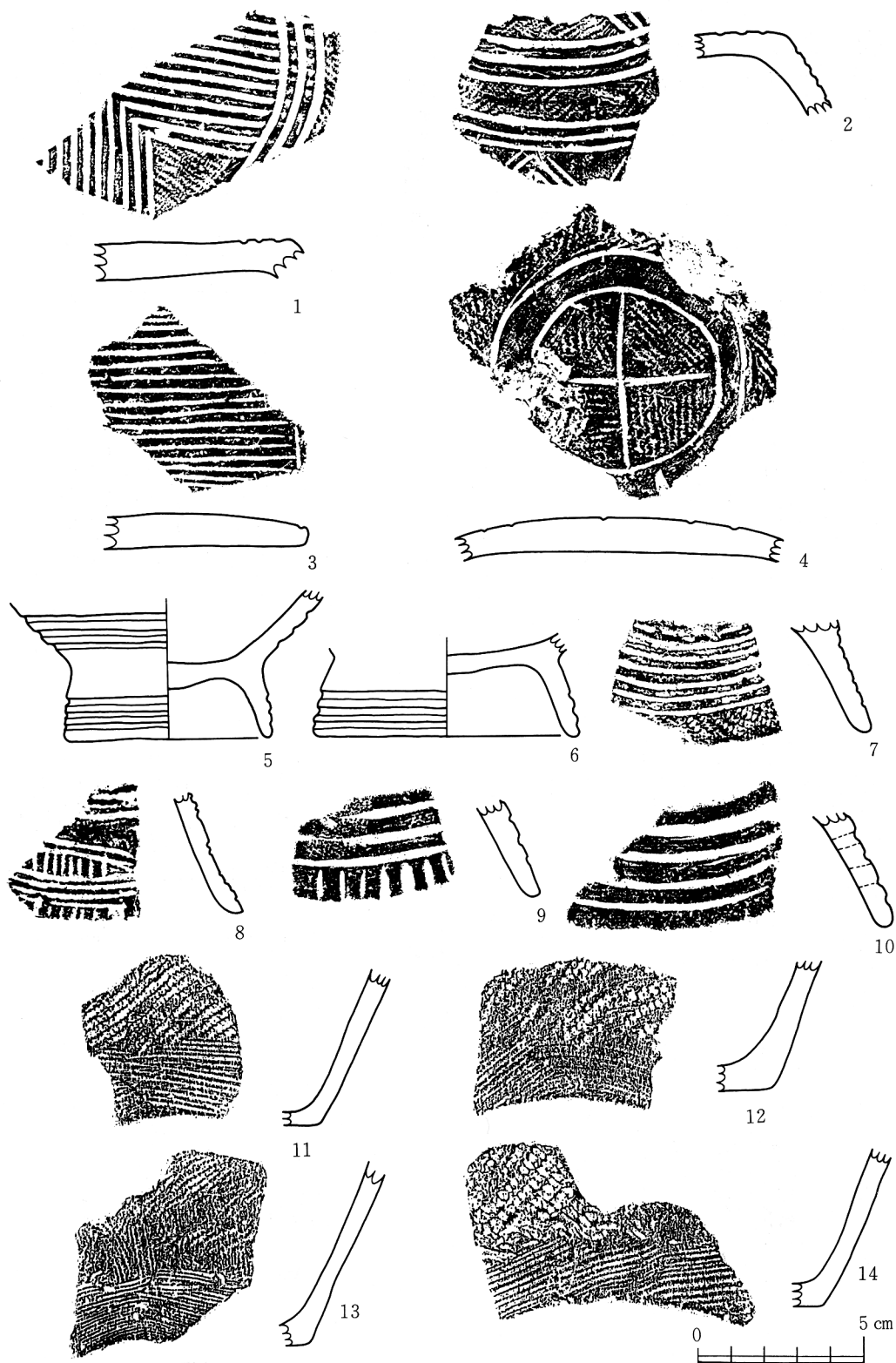
第33図 土 器

1・2, IVd類 3, IVe類 4, IVb類 5, IVf類 6・10・14, Va₁類 7~9, 11~13, Va₂類

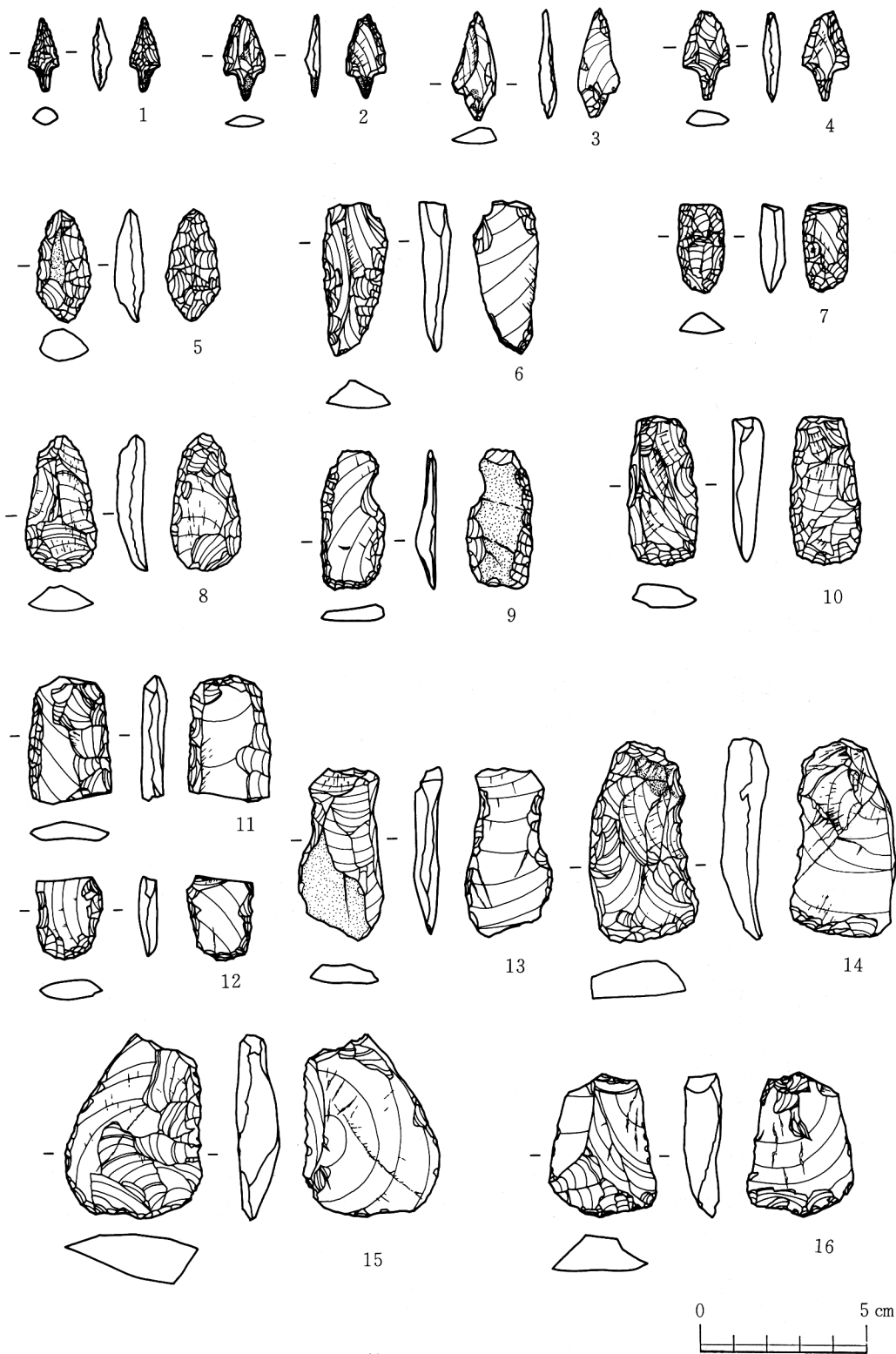


第34図 土 器

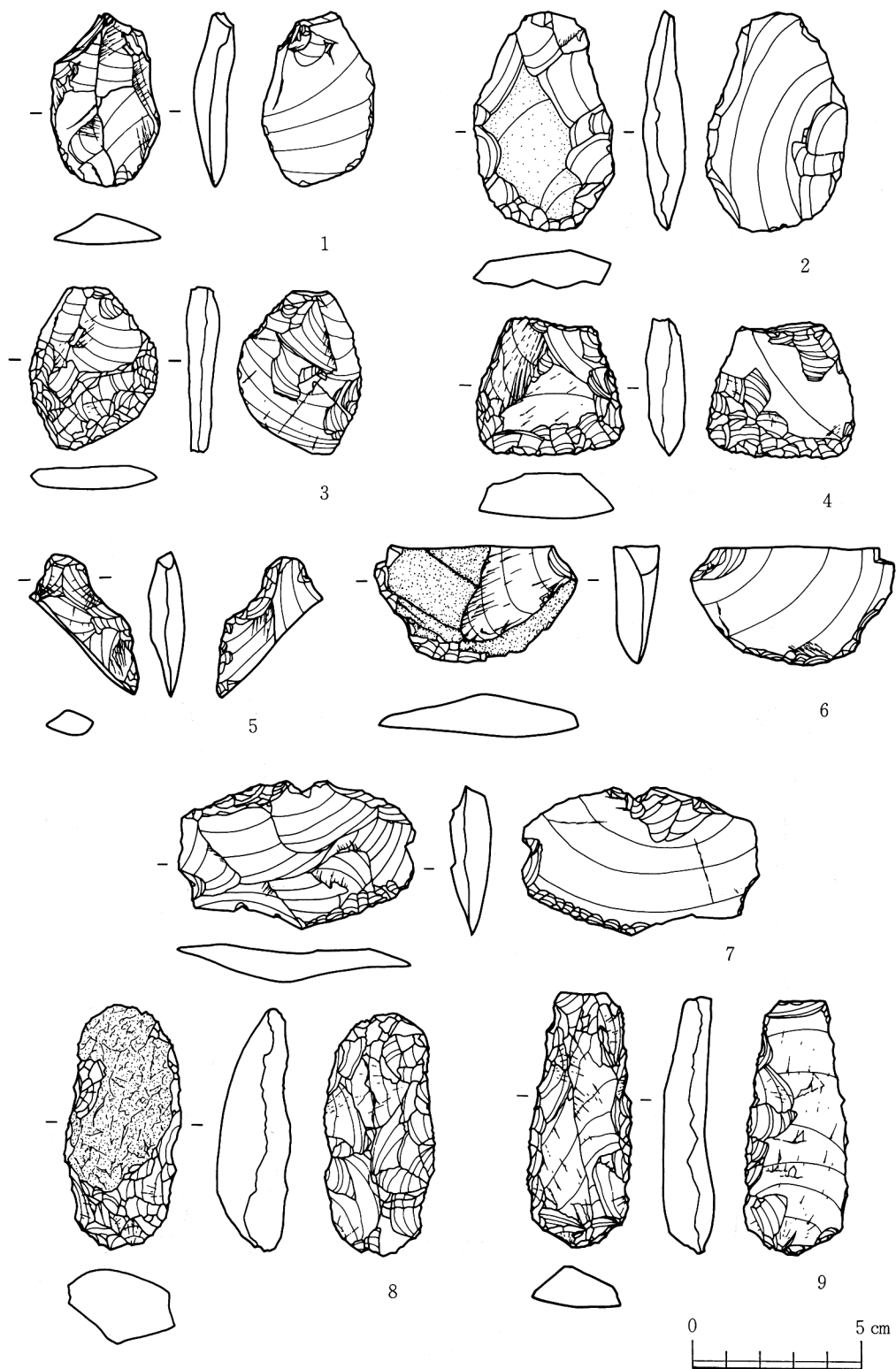
1・5～8, Va₁類 2・4, Va₃類 3・9, Va₄類 10～12, Vb類



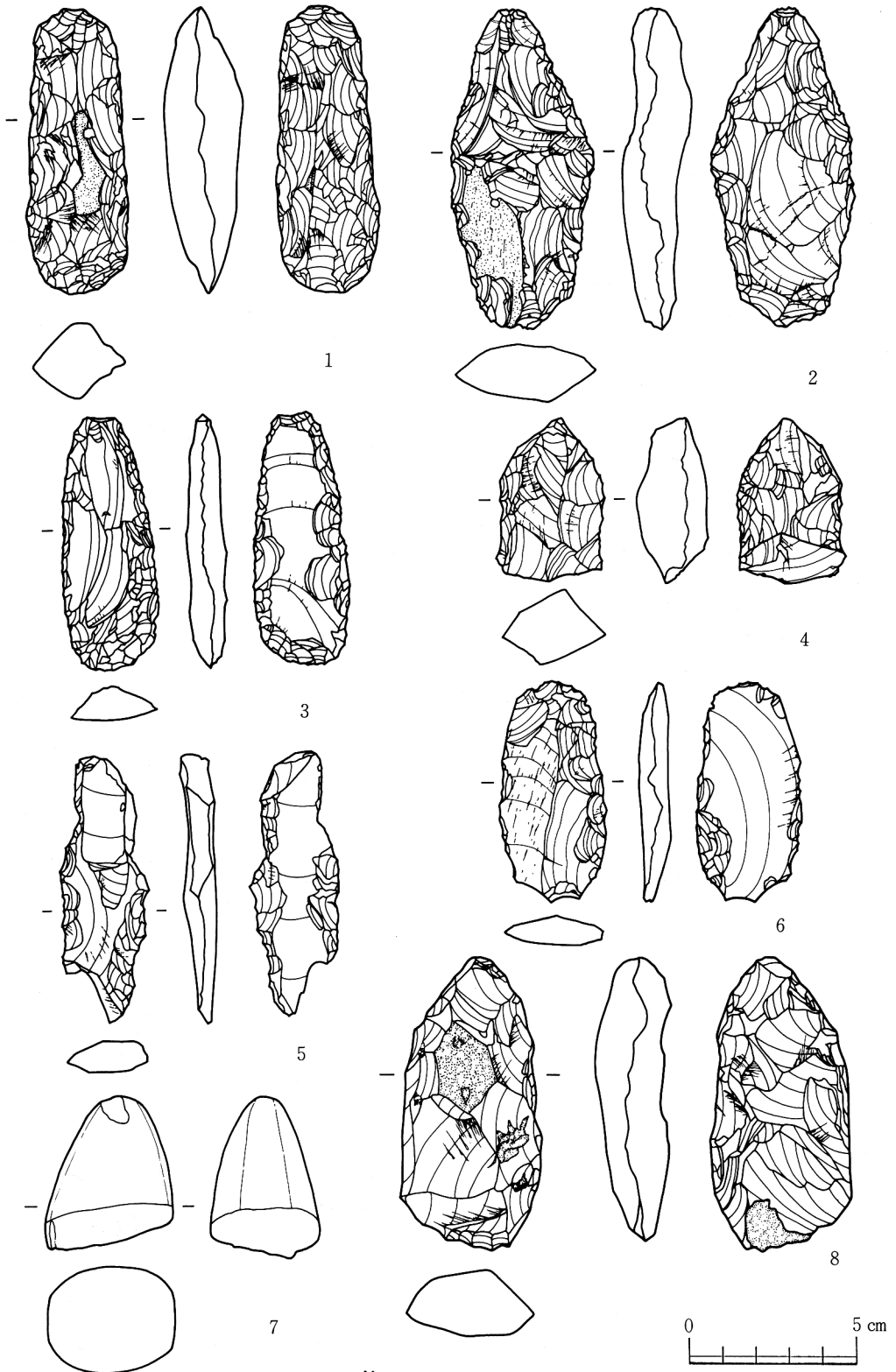
第35図 土 器 1・2, Vb類 3・4, Vc類



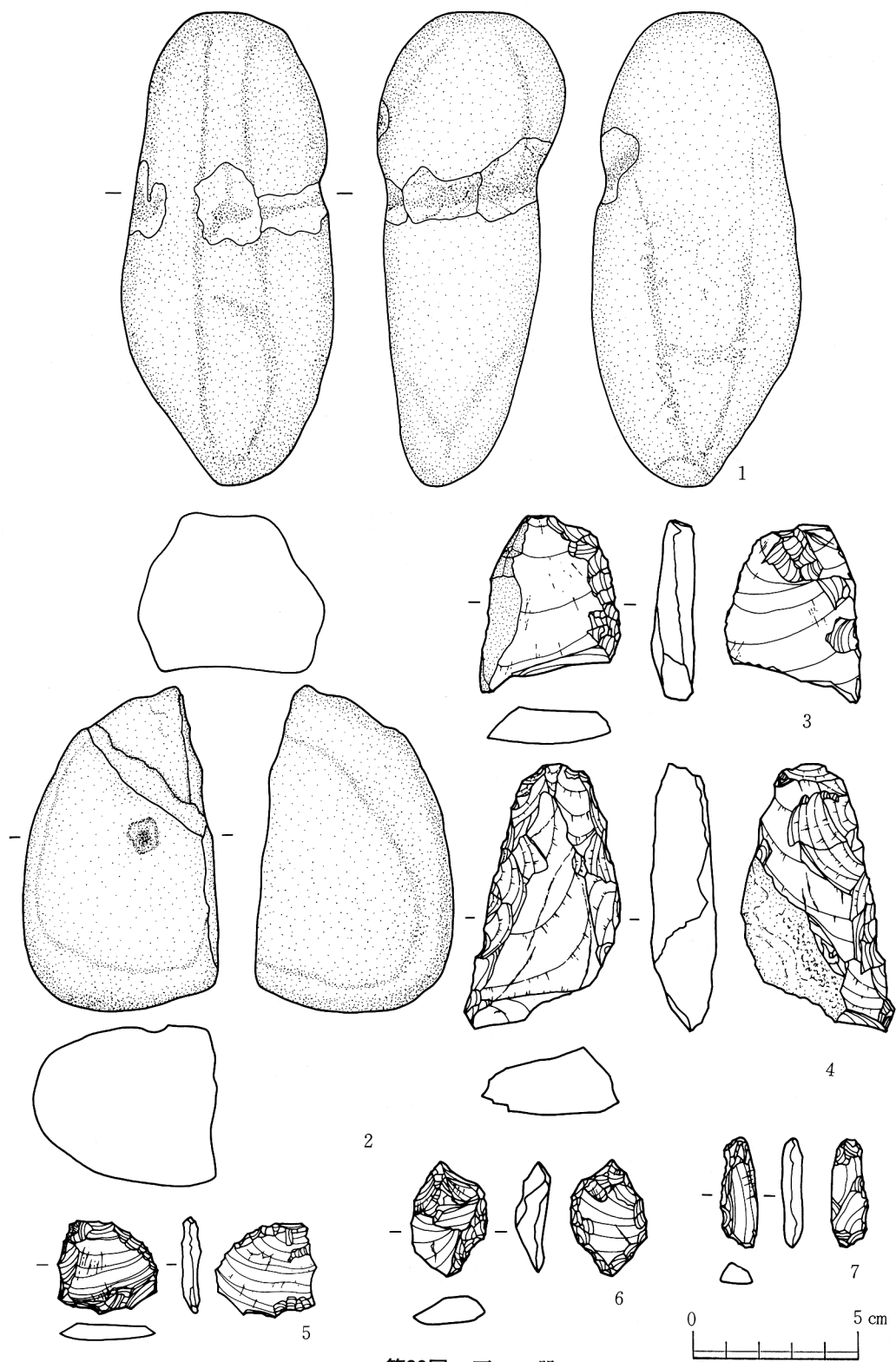
第36図 石 器



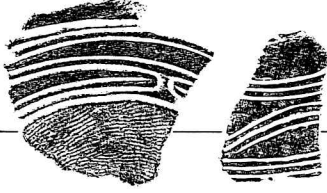
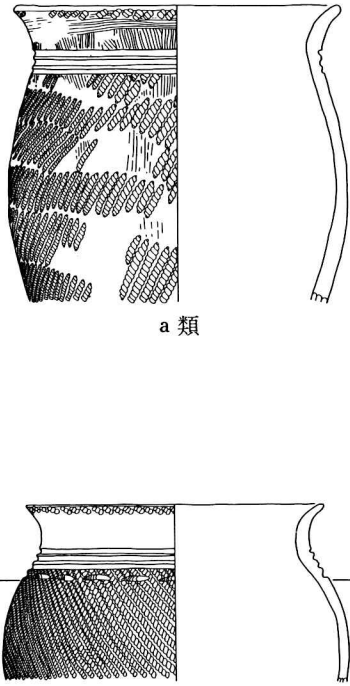
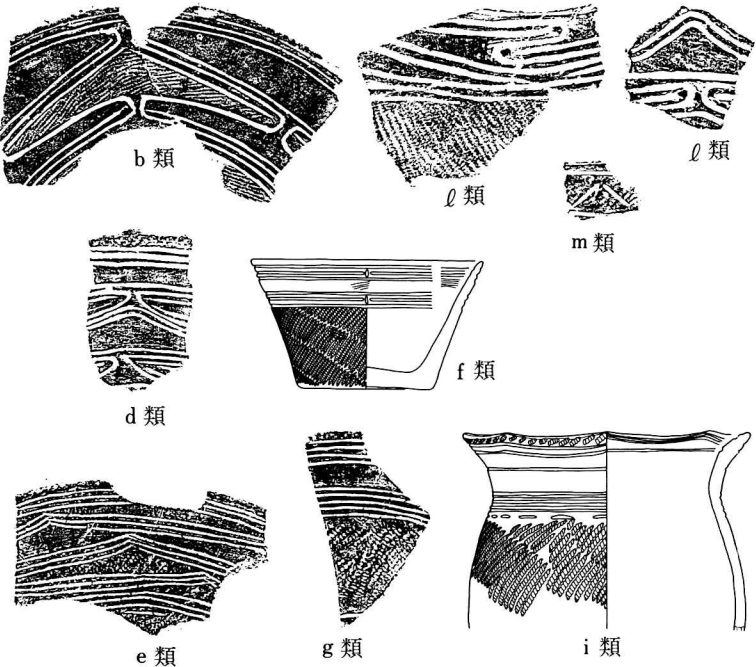
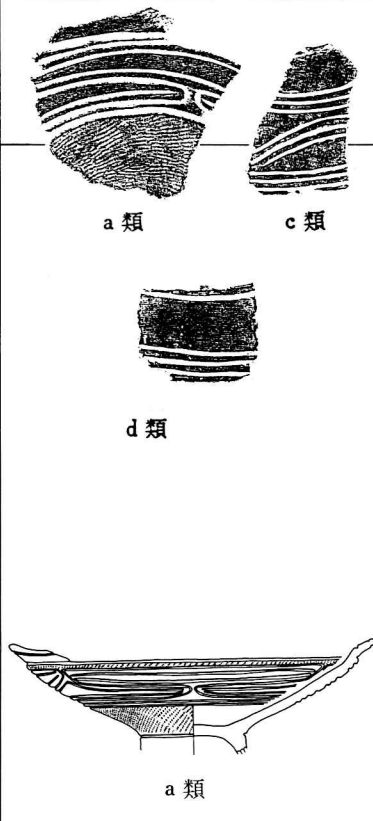
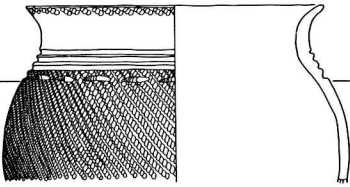
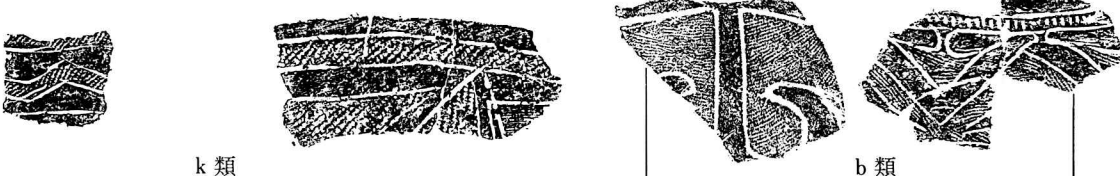
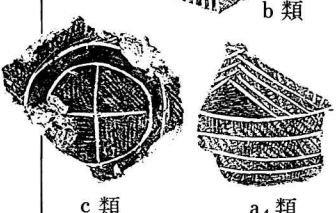
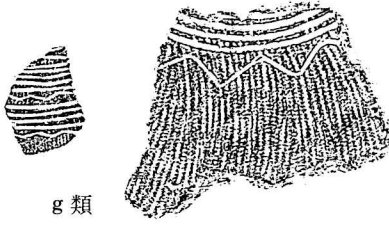
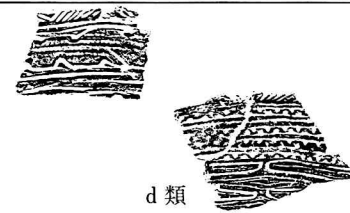
第37図 石 器



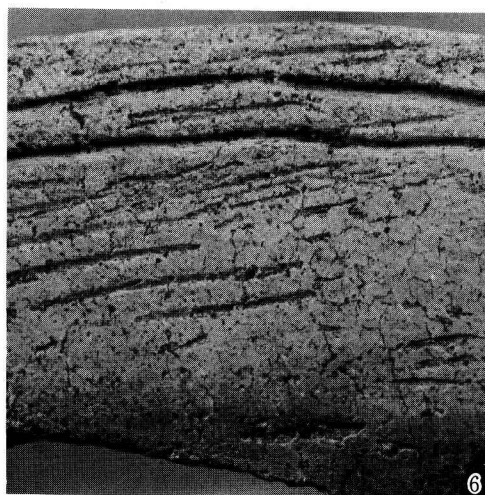
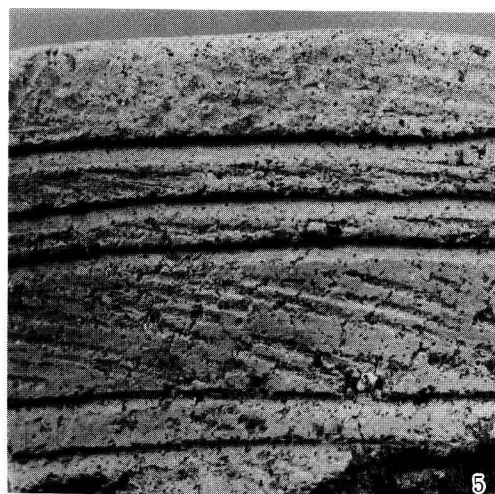
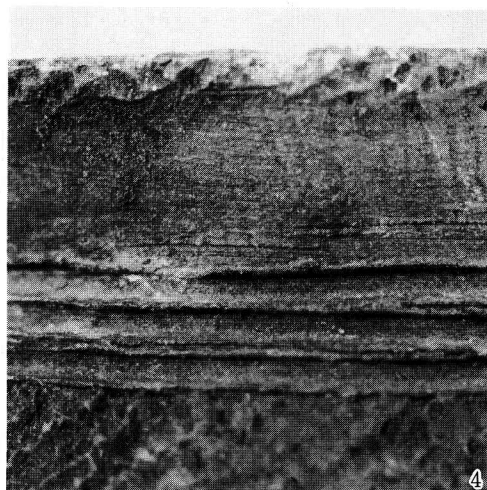
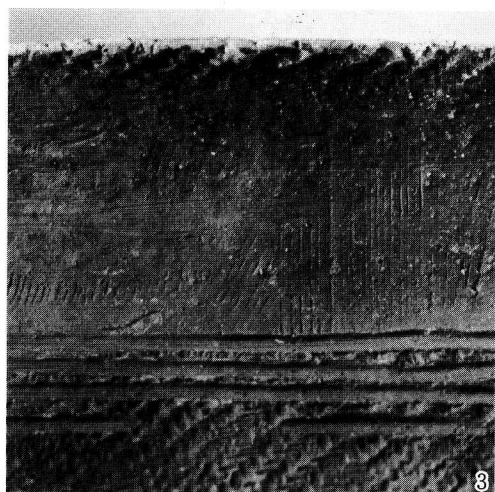
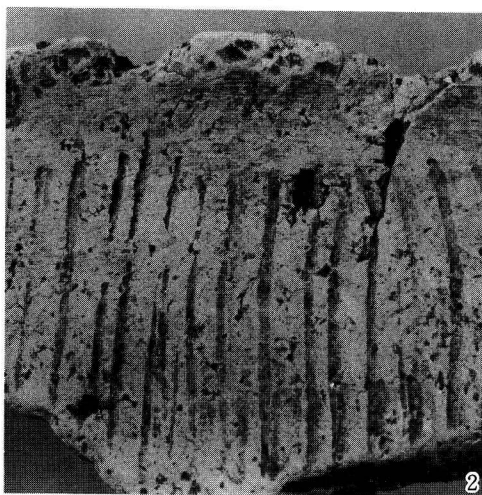
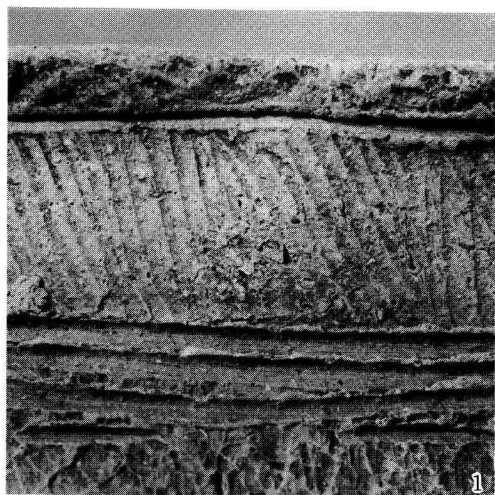
第38図 石 器



第39図 石 器

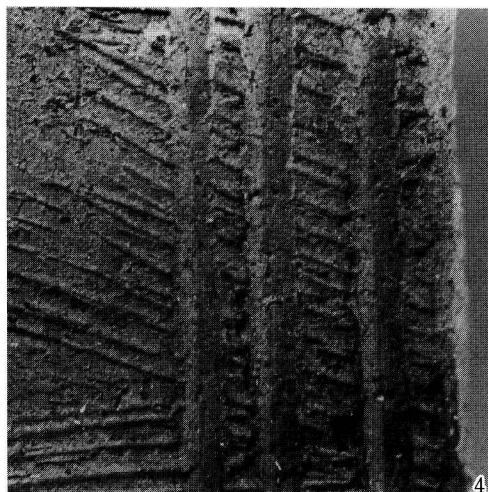
	I 類 (甕形土器)	II 類 (鉢形土器)	III 類 (壺形土器)	IV 類 (高坏形土器)	V 類 (蓋形土器)
1 群		 a 類	 a 類 c 類	 a 類 c 類	
2 群	 a 類	 b 類 l 類 m 類 d 類 f 類 g 類 i 類	 d 類 c 類 e 類 c 類	 a 類 d 類 a 類	 a ₃ 類 a ₂ 類
3 群	 a 類	 k 類 b 類	 b 類 e 類	 c 類 a ₄ 類	
4 群	 c 類	 h 類 o 類 h 類	 g 類	 f 類	
5 群	 d 類	 p 類			

第40図 大倉遺跡における弥生土器の分類と編年

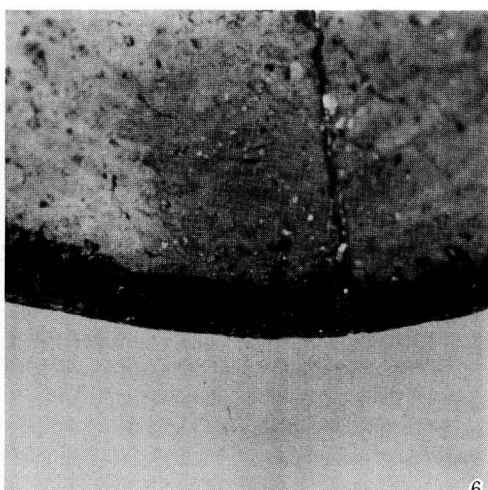
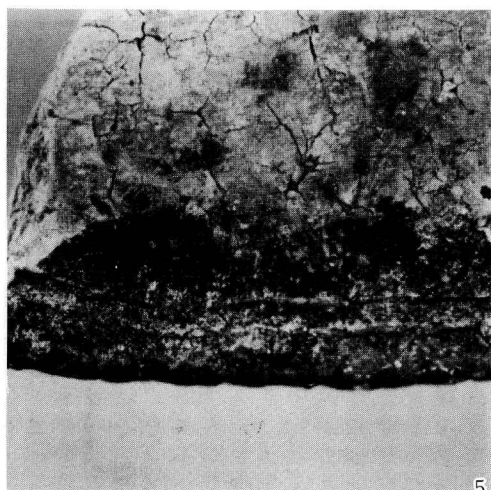
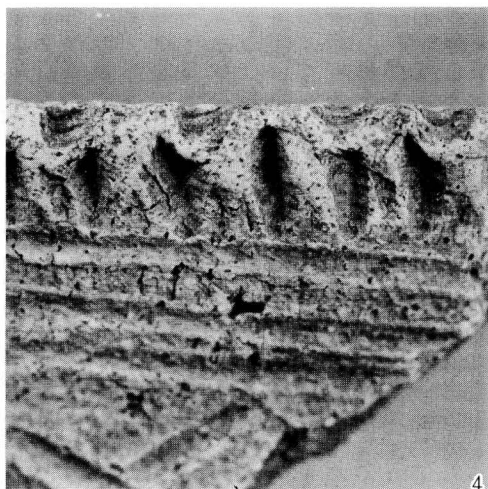
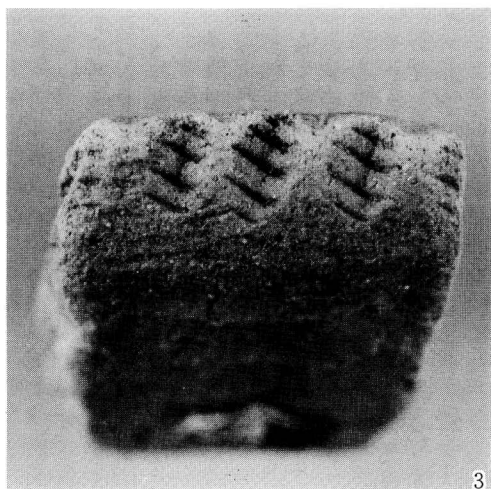
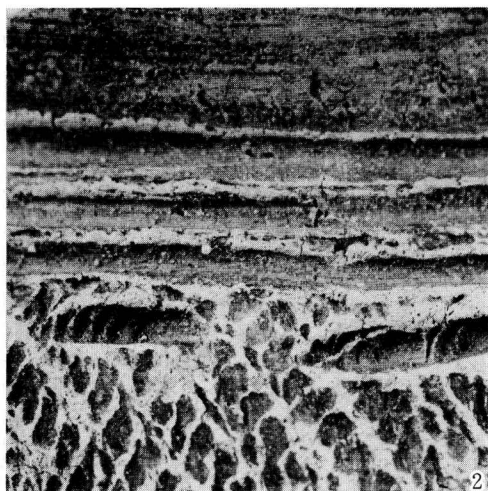
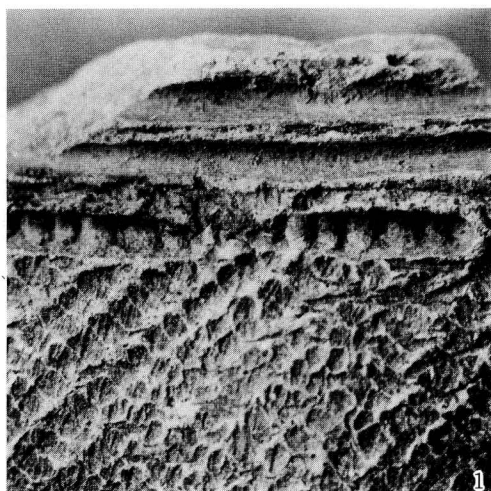


1・2 甕頸部の刷毛目 3・4 甕頸部の刷毛目→ヨコナデ
5・6 甕頸部の刷毛目→匏磨き

第二図版
弥生土器細部

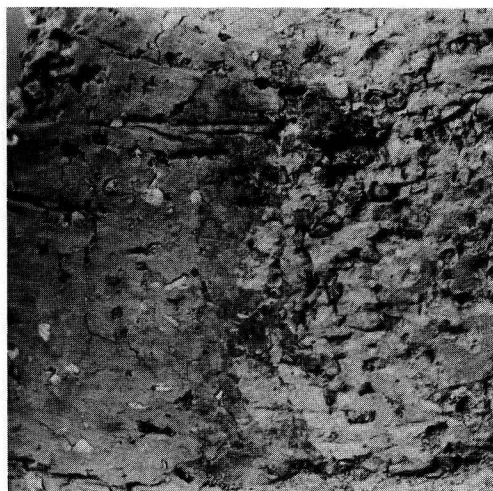


1・2 鉢の刷毛目→篋磨き 3 壺内面の刷毛目→篋磨き 4 壺外面の刷毛目→沈線
5 甕外面の刷毛目→縄文 6 甕内面の篋磨き

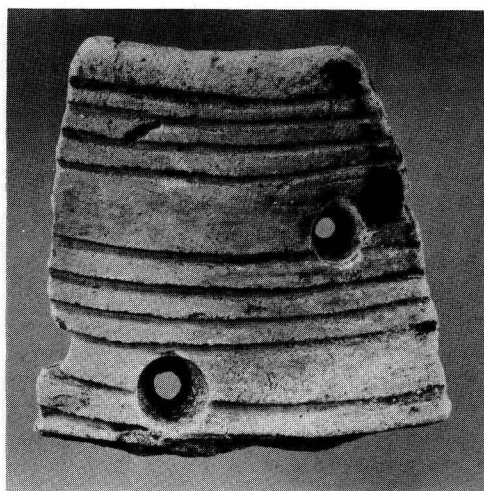


1・2 甕の木目列点文 3 鉢口縁部内面の木目刻み目文 4 鉢口縁部の木目刻み目文
5・6 蓋口縁部内面に付着した炭化物

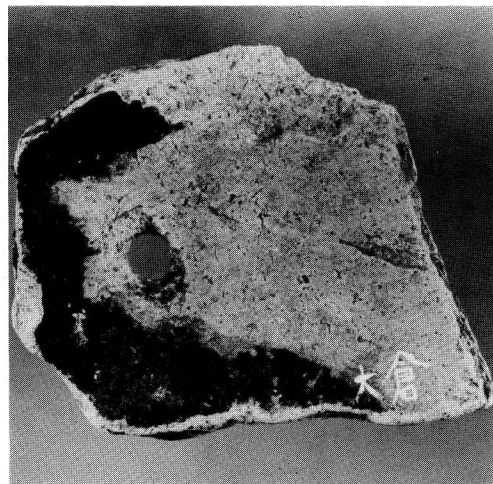
第四図版
弥生土器細部



1



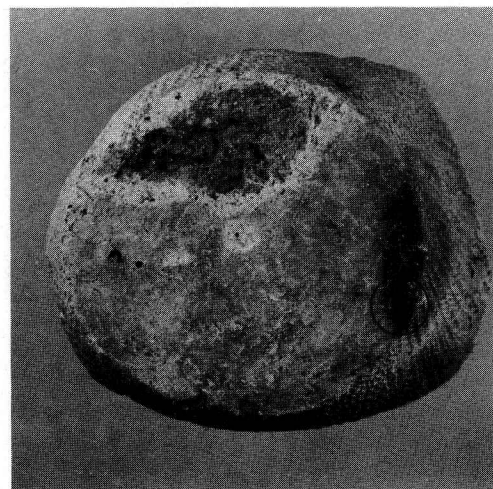
2



3



4



5



6

1 砂の混和 2～4 補修孔と天然アスファルト 5・6 底部の稲稈圧痕